日本通訳翻訳学会
第 26 回年次大会

スケジュール
交通アクセスと会場案内
基調講演
予稿集

2025 年 9 月 6 日（土）ー7 日（日）
会場　東京科学大学 大岡山キャンパス

日本通訳翻訳学会 第 26 回年次大会スケジュール

開催日：2025 年 9 月 6 日（土）～7 日（日）
会場：東京科学大学 大岡山キャンパス 西講義棟1（6 日午前）、西 8 号館 E（W8E）（6 日午後・7 日）

第 1 日（9 月 6 日）

9:30	西講義棟1 レクチャーシアター 入口ホール 受付開始		
9:45 –9:55	西講義棟1 レクチャーシアター 開会式		
10:00 –11:20	西講義棟1 レクチャーシアター **基調講演** “Film Adaptation, Translation Theory, Critique.” Lawrence Venuti（テンプル大学名誉教授） （司会： 野原佳代子）		
11:30 –12:20	西講義棟1 レクチャーシアター **総会**		
12:20 –13:30	休憩	W8E 307 (12:30 – 13:20) 院生コロキウム 院生有志による自主セッション （司会：木内晶基 ）	W8E 306 (12:30 – 13:20) 評議員会
	W8E 101（1 階） **A 会場**	W8E 307（3 階） **B 会場**	W8E 308（3 階） **C 会場**
13:30 –14:00	A-1「福澤諭吉と近代社会思想の受容：日本語の再解釈、外国語への逆翻訳」 アルベルト・ミヤンマルティン（慶應義塾大学） （司会：長沼美香子）	B-1 「大学の授業における通訳の評価に対する取り組み」 西畑香里（東京外国語大学） （司会：稲生衣代）	C-1「日本の Feminist Translator Studies の可能性を探る」 古川弘子（東北学院大学） （司会：山木戸浩子）
14:05 –14:35	A-2「『おくのほそ道』における「取り合わせ」型俳句の英語翻訳について」 守田美子（大妻女子大学） （司会：長沼美香子）	B-2「通訳行為における「共在 co-presence」への達成：盲ろう者に対する触手話技能の考察から」 飯田奈美子 (関西外国語大学他非常勤講師) （司会：稲生衣代）	C-2「翻訳修正の効果を説明するメタ言語の洗練と検証」 山本真佑花（東京大学 D）、宮田玲（東京大学） （司会：山木戸浩子）
14:40 –15:10	A-3 “Translating the Texture of Time: Sand Metaphors in Woman in the Dunes Across Japanese, English, Bulgarian, and German” Vasilev Todor Ivanov (Kobe University D) （司会：長沼美香子）	B-3「外国語（英語）習得を主たる目的としない大学通訳プログラムにおける同時通訳インターンシップ制度の確立と運営：国際基督教大学 8 年間の道のりと今後の課題」 田村智子（国際基督教大学） （司会：稲生衣代）	C-3「訳語の定着に関するコーパス分析：色彩語彙の英日翻訳を事例として」 木内晶基（東京科学大学 D）、野原佳代子（東京科学大学）、朱心茹（東京科学大学） （司会：山木戸浩子）
15:20 –15:50	A-4「重訳（relay translation）——「うさこちゃんシリーズ」（ミッフィー）を題材に」 尹惠貞（一橋大学） （司会：飯田奈美子）	B-4 B-5「通訳者に対する社会の認識の変化（追跡調査）」 高橋絹子（関西大学）、木村護郎クリストフ（上智大学）、内藤稔（東京外国語大学）、岩崎修子（関西大学）、田中鞠安（関西大学）	C-4「NHK国際放送の歴史と現況：現場の担い手たちによる海外発信の変遷」 高橋弘行（駒澤大学 D） （司会：藤濤文子）
15:55 –16:25	A-5「インドネシアにおける日本文学翻訳の転換点：川端康成『雪国』の 3 訳をめぐって」 岡田莉子（東京外国語大学 D） （司会：飯田奈美子）		C-5「地方自治体職員による機械翻訳の使用と課題：翻訳品質保証の方略に注目して」 阪本章子（関西大学）、宮田玲（東京大学） （司会：藤濤文子）

16:30 –17:00	A-6　A-7「「日本から発信する TS の未来」を考えるパネルディスカッション」 内山明子（クイーンズランド大学）、コックリル浩子（クイーンズランド大学）、佐藤美希（札幌大学）、佐藤＝ロスベアグ・ナナ（ロンドン大学 SOAS）、長沼美香子（神戸市外国語大学）	B-6「大学院における「通訳実践指導」の授業設計と効果」 董海濤（北京外国語大学） （司会：西畑香里）	C-6「自治体の「多文化共生の推進に係る指針・計画」における通訳・翻訳の位置づけの分析：指定都市、中核市、特別区を対象に」 宮田玲（東京大学）、島津美和子（立教大学） （司会：藤濤文子）
17:05 –17:35		B-7「技術支援を活用した視線追跡と訳出品質に関する研究：学生通訳者に焦点を当てて」 張晶（北京大学）、張乾乾（北京大学） （司会：西畑香里）	C-7「自治体の多言語対応における課題：持続可能性の観点から」 武田珂代子（立教大学）、稲垣浩（國學院大学） （司会：藤濤文子）
18:00 –20:00	西 5 号館「つばめテラス」 **懇親会** ※懇親会費（一般 5,000 円、学生 3,000 円）		

第 2 日（9 月 7 日）

	W8E 101　**A 会場**	W8E 307　**B 会場**	W8E 308　**C 会場**
9:20 –9:50	A-8「記号間翻訳としての可聴化：マッピングの理論的検討」 藤本未来（東京科学大学 D）、野原佳代子（東京科学大学） （司会：篠原有子）	B-8「警察における捜査通訳の構造的課題：非日本語話者の権利保障の視点から」 道上史絵（立命館大学）、村上智里（関西大学）、吉田理加（愛知県立大学） （司会：石原知英）	C-8「日中産業翻訳者のポストエディット能力とキャリアプロセスに関する質的研究」 単凱（東京科学大学 D）、佐藤礼子（東京科学大学） （司会：石塚浩之）
9:55 –10:25	A-9「テレビドラマ『孤独のグルメ』の中国語字幕における異文化要素の翻訳：マルチモーダル談話分析の枠組みをもとに」 庄妍（神戸大学 D） （司会：篠原有子）	B-9「日本における司法通訳制度設計への提言—アメリカ、イギリスの実施例をもとに」 毛利雅子（名古屋市立大学） （司会：石原知英）	C-9「ポストエディットが翻訳者の仕事満足度とやる気に与える影響：統計的手法による考察」 阪本章子（関西大学） （司会：石塚浩之）
10:30 –11:00	A-10　"The evolution of amekomi translations in Japan: Interplay of foreignization and domestication strategies" Maurice Alesch (Kyoto University) （司会：篠原有子）	B-10「取調べにおける可視化導入がもたらす要通訳事件における訳出検証への影響」 田村智子（国際基督教大学） （司会：石原知英）	C-10「知識翻訳学に基づく科学ニュース中日翻訳ストラテジー：MTPE モデルによるポストエディットを中心に」 程琳（北京科技大学 M）、李正政（北京科技大学） （司会：石塚浩之）
11:10 –11:40	A-11「異質なる闇の受容：*The Cthulhu Casebooks Series* の日本語訳と台湾華語訳を例に」 余玟欣（神戸大学） （司会：北代美和子）	B-11「通訳者を介した法律相談：相談者の個人的目的に則した通訳者の訳出行為と相談構造への影響に関する考察」 森元亜紀子（神戸市外国語大学 D） （司会：内藤稔）	C-11「日中通訳初学者の逐次通訳における談話理解：談話の結束性と一貫性を中心に」 晏昭平（城西国際大学 D） （司会：朱藹琳）
11:45 –12:15	A-12　「モンゴル語聖書の神の訳語をめぐって」 北村彰秀（モンゴル聖書宣教会） （司会：北代美和子）	B-12「相談通訳者とは：相談員それとも通訳者」 岩田久美（一般社団法人多文化社会専門職機構） （司会：内藤稔）	C-12「日中 2 言語における慣用句の訳出過程に関する実証的研究」 楊潔氷（河南理工大学、東京都立大学） （司会：朱藹琳）
12:15 –13:15	休憩 W8E 1001（10 階）　ポスター発表		W8E 306　(12:20 – 13:05) 理事会

	W8E 101 **A 会場**	W8E 307 **B 会場**	W8E 308 **C 会場**
13:15 –13:45	A-13「日本語の文字(種)の書き分けによる言葉遊びの翻訳: 村上春樹(著)「夜のくもざる」をケーススタディとして」 山木戸浩子 (藤女子大学) (司会:古川弘子)	B-13「「英語の達人」とされる通訳者の先人たちの学習方略」 内藤稔 (東京外国語大学)、高橋絹子 (関西大学) (司会:武田珂代子)	C-13 「訳語の品質を明示した日中対訳用語集の構築と分析」 朴惠 (上海外国語大学・東京大学)、宮田玲 (東京大学)、山浦育子 (東京都江戸川区多文化共生センター) (司会:佐藤美希)
13:50 –14:20	A-14「英語映画の日本語字幕に見られる文末詞によるジェンダー的性格の強調に関する分析」 永岡由之 (東京科学大学 M) (司会:古川弘子)	B-14 「機械翻訳を介するコミュニケーションはいかに成り立つのか—在中日系企業の日本人駐在員の事例から—」 朱藹琳 (愛知大学) (司会:武田珂代子)	C-14「現代中国語から現代日本語への翻訳/通訳における中国古典籍引用の処理について」 永田小絵 (東洋大学 D) (司会:佐藤美希)
14:25 –14:55	A-15「表象的に再現するもの:吹き替え翻訳に関わる創造的プロセス」 Samara Mabelli Ferreira Andrade (神戸大学 D) (司会:古川弘子)	B-15 「日本におけるラグビー通訳者に関する考察:インタビュー調査結果から」 松見誌野 (名古屋外国語大学、 名古屋市立大学 D) (司会:武田珂代子)	C -15「近代『茶経』の和訳本と『茶の本』の思想的対照:近代日本における中国古典翻訳の一側面」 陸書涵 (大阪大学 D) (司会:佐藤美希)
15:05 –15:35	A-16「翻訳研究における人類学的方法論の可能性と課題」 鋤柄史子 (神戸大学) (司会:大久保友博)	B-16「能動的推論による翻訳プロセスモデルの構築と検証:翻訳者の「驚き」を定量化するシミュレーション」 溝脇孝哲 (立教大学 D)、山田優 (立教大学)、Michael Carl (Kent State University)、Yuxiang Wei (Saint Francis University)、Aishvarya Raj (London Interdisciplinary School)、Devi Sri Bandaru (Kent State University)、Xinyue Ren (Kent State University) (司会:宮田玲)	C-16「高等学校国語科と英語科との連携による翻訳者の解釈をめぐる教材開発:『こころ』とその英訳作品を中心に」 守田智裕 (広島大学附属福山中・高等学校)、井上泰 (福山大学) (司会:田村智子)
15:40 –16:10	A-17「キケローの翻訳思想」 藤本時子 (近畿大学工業高等専門学校) (司会:大久保友博)	B-17「自動車企業の通訳実践を通じた通訳者の役割転換」 鄧麗姍 (通訳者)、龐焱 (広東外語外貿大学) (司会:宮田玲)	C-17 "Practicing Translators' views on the AI-related copyright law and its issues." Ryohei Watanabe (Rikkyo University M) (司会:田村智子)
16:15 –16:45			予備枠 (司会:田村智子)

- 研究発表は、発表 20 分＋質疑応答 10 分です。質問は発表内容に直接関連したことについてのみ、手短に行うものとします。質問者の単なる意見の陳述はご遠慮ください。
- 各発表間の 5(一部 10)分間は、出入室のための時間です。移動はすみやかにお願いします。
- 研究発表・講演の撮影・録画・録音は、発表者・講演者の許可を得ている場合を除き、ご遠慮ください。
- 発表者の記載にある M および D は、それぞれ発表者が博士前期課程(修士課程)、博士後期課程の学生会員であることを示します。
- W8E 1001はポスター発表会場として使用するほか、休憩室としてもご利用いただけます。ただし食事はご遠慮ください。昼休みの食事は発表会場等でお願いします。
- 西8号館入口すぐのロビーでは、出版社による書籍展示・販売も行っています。

参加者の皆様へ:

- 年次大会・総会への参加登録は、以下の URL・QR コードの申し込みフォーム（Google フォーム）で行ってください。（返信用ハガキでの出欠確認はいたしません。）学会ウェブサイトにもリンクがあります。また、学会員の皆様にはメーリングリストでもお知らせします。

  ・年次大会・総会申し込みフォーム： https://forms.gle/3BM5ffZTJAeDPFJP6

  ・日本通訳翻訳学会ウェブサイト： https://jaits.jp/

- 参加登録の締め切りは、8 月 31 日（日）です（ただし、懇親会ご参加の場合は 8 月 20 日（水）まで）。（手話通訳をご希望される方は、準備の関係上、8 月 4 日（月）までにご登録ください。）

発表者の皆様へ:

- 研究発表用のプレゼンテーションファイルは、9 月 5 日 17:00 までに https://x.gd/eZXx8 にご送付ください。各室に発表用 PC を用意いたします。発表者の交代時間が 5 分ですので、特にご自分の PC を使いたい方は、当日事前に余裕をもって接続確認をお済ませください。PC に HDMI の接続口がない場合は、必要なアダプタをご用意ください。
- 資料を配布いただくことも可能です。配布される場合は、ご自身で必要部数（40 部程度）をご準備いただき、当日ご持参ください。教室での配布については、会場スタッフがお手伝いいたします。
- ポスター発表で掲出するポスターは、各自で印刷したものを当日ご持参ください。ポスターのサイズは A0 あるいは A1（縦横の指定なし）をご用意ください。コアタイム（ポスター発表会場に発表者が必ずいる時間）は 2 日目の 12:15-13:15 です。ポスターは、1 日目の午前から掲示いただけます。
- 発表の内容に関して、個人情報や守秘義務、二重投稿／二重発表、無断引用などには十分ご留意ください。

懇親会の参加申し込みについて:

- 懇親会に参加希望の方は、Peatix から事前に会費のお支払いをお願いします。**大会申し込み Google フォームより出欠をお知らせください。詳細は追ってお知らせします**。当日のお申し込みは現地にてご相談ください。

[第 26 回年次大会実行委員会]

野原佳代子（委員長）、蓮池通子、木内晶基、藤本未来、永岡由之、金城侑伸

[会場校事務局] 東京科学大学スタッフ

[大会プログラム担当理事]

齊藤美野 （代理 藤濤文子）

交通アクセス

東京科学大学（旧・東京工業大学）大岡山キャンパス
◎東京科学大学はキャンパスが複数あります、お間違えのないようご注意ください。

大岡山東・西・南地区

大岡山西地区

13	大岡山西1号館	14	大岡山西2号館	15	大岡山西3号館
16	大岡山西4号館	17	大岡山西講義棟1（レクチャーシアター）	18	大岡山西講義棟2
19	大岡山西7号館	20	大岡山西8号館（W）	21	大岡山西8号館（E）
22	大岡山西9号館	24	70周年記念講堂	25	屋内運動場
28	サークル棟2	31	サークル棟3	48	大岡山西5号館

所在地：〒152-8550 東京都目黒区大岡山 2-12-1

- 最寄り駅： 大岡山駅（東急大井町線・目黒線）札口出てすぐ左手に正門が見えます。正門まで徒歩 1 分、会場まで徒歩 5 分程度。
- 会場： 基調講演・総会（9/6 午前）と研究発表（9/6 午後・9/7）は建物が異なりますのでご注意ください（移動時間は 2～3 分）。
- 受付： 1 日目午前中は地図上⑰西講義棟 1（レクチャーシアター）、午後からは㉑西 8 号館(E)、2 日目は㉑西 8 号館(E)へお越しください。
- 懇親会： キャンパス内の西 5 号館 2 階「つばめテラス」地図中㊽にて開催します。

第１日（9 月 6 日）　西講義棟１ レクチャーシアター　10:00 – 11:20

基調講演

“Film Adaptation, Translation Theory, Critique.”
「映画のアダプテーション・翻訳理論・批評」

Lawrence Venuti 氏
（テンプル大学名誉教授）

要旨

翻訳理論は、映画のアダプテーション（翻案）について私たちの思考を深化させ、より厳密な批評的方法論の構築を可能にしてくれる。二次的創作物とその原資料の間の関係性は、単なる道具的なものではなく解釈学的性格のものである。それは、翻訳者や映画制作者が適用する解釈的要因、すなわち「解釈項（interpretant）」に基づいて構築されるからである。こうした解釈学的関係は、原資料の形式や意味を確定させようとする「解釈的」行為としてだけでなく、原資料およびそれを処理したあとの翻訳やアダプテーションの、文化・社会的条件を浮かび上がらせる、「問いを投げかける」（interrogative）行為としてもとらえることができよう。批評家もまた、批評的方法論や特定の解釈といった解釈項を適用することで、解釈学的関係と問いかけ的な効果の両方を明示する役割を担っている。

参考：ミケランジェロ・アントニオーニ監督による *Blow-Up* (1966)（邦題『欲望』）を事前に視聴しておくことが Venuti 氏により推奨されています。

プロフィール

翻訳理論・翻訳史研究者、イタリア語・フランス語・カタルーニャ語の翻訳者として幅広く活躍。主著書 *The Translator's Invisibility: A History of Translation* (3rd ed., 2018)、*The Scandals of Translation: Towards an Ethics of Difference* (1998)、*Translation Changes Everything: Theory and Practice* (2013)、*Contra Instrumentalism: A Translation Polemic* (2019) 等多数。また編著書として *Rethinking Translation: Discourse, Subjectivity, Ideology* (1992/2020)、*The Translation Studies Reader* (4th ed., 2021) 等を手がける。最近の訳書に Dino Buzzati の *The Stronghold* (2023) ならびに *The Bewitched Bourgeois: Fifty Stories* (2025) 等がある。氏の論文、書評、翻訳は *Harper's*, *PMLA*, *Public Books*, *Times Literary Supplement* 等の主要な学術誌・文芸誌に掲載されている。

司会
野原佳代子（東京科学大学）

第 1 日（9 月 6 日）A 会場（W8E 101）　13:30 – 14:00
A-1　司会：長沼美香子

福澤諭吉と近代社会思想の受容：日本語の再解釈、外国語への逆翻訳

アルベルト・ミヤンマルティン（慶應義塾大学）

幕末から明治期にかけての啓蒙思想家たちは、江戸時代の蘭学者による翻訳手法を継承しつつ、「哲学」や「権利」などの造語を利用し、また「文化」や「自然」といった古典漢語に新たな概念的内実を付与することによって、西洋文明の受容を試みた。そして、その試みは多くの場合において成功を収めたと言えよう。福澤諭吉も、speech を「演説」と訳し、liberty の概念に既存の漢語である「自由」を対応させたことは周知の事実である。柳父章は、「カセット効果」の概念を提示したうえで、福澤による翻訳の方法を次のように評価している。「福沢諭吉は、日本の現実の中に生きている日本語を用いて、ことば使いの工夫によって、新しい、異質な思想を語ろうとした。そのことによって、私たちの日常に生きていることばの意味を変え、またそれを通して、私たちの現実そのものを変えようとしたのである。」（柳父, 1982, p. 37）

このような評価は、主に当時の日本人にとって馴染みのなかった新漢語に対するものである。また、これは特に語彙の翻訳に着目した視点からなされていると言えよう。それに加えて、福澤は、特に初期の著作において、単なる語彙レベルにとどまらない翻訳的意識を有していたと見られる。彼は、文章全体の論理構造を構築しながら、メタ言語的な観点から日本語における既存の表現の意味を再構成しようとする試みも行っていた。

本研究では、福澤諭吉が故郷・中津の旧友に宛てて執筆し、『学問のすゝめ』の基盤ともなった「中津留別之書」（1871 年）を分析対象とする。本書において福澤は、主に米国人思想家ウェーランドから影響を受けた自由と独立の精神、男女の平等、親子関係における双方向的理解、さらには政府と人民の対等な関係といった理念の普及を意図している。その際、彼は読者の既存の知的枠組みを再解釈させ、「夫婦の別」や「君臣の義」などの儒教用語に対して新たな近代的意味を付与する試みを行っている。特に夫婦関係に関しては、一夫多妻への批判が顕著に見られることから、本研究では福澤の女性論（主に男女同権論と夫婦創姓論）を参照しつつ、彼の言葉使いのトリックがいかにして男女平等の言説構築に寄与しているかを考察する。

最後に、西澤・ミヤンマルティン（2022）に収載された世界の主要 12 言語への翻訳事例を比較対照し、西洋文明を伝えるために利用された日本語が「逆翻訳」される際に生じる問題点および、それに対する対応傾向について、具体的なデータに基づいて検討を加える。

【参考文献】

西澤直子／アルベルト・ミヤンマルティン共編著訳（2022）『「中津留別之書」――多言語で読む福澤諭吉』慶應義塾福澤研究センター
柳父章（1982）『翻訳語成立事情』岩波書店

第 1 日（9 月 6 日）A 会場（W8E 101）　14:05 – 14:35
A-2　司会：長沼美香子

『おくのほそ道』における「取り合わせ」型俳句の英語翻訳について

守田 美子（大妻女子大学）

俳句には「一物仕立て」と「取り合わせ」という 2 つの型があり、前者は単一情景を、後者は2つの情景を 17 文字で表現する。「取り合わせ」型俳句で組み合わせられる情景は、「二物衝撃」と呼ばれるように、直接的な相互関係を持たず、できれば意外性や対比が見られるものが望ましいとされる。 たとえば、作者の視点が近景から遠景に移動したり、室内から室外へ場面が切り替えられたり、出来事の客観的な描写から、作者のより主観的な描写、または心に浮かんだ風景へと転換したりする。複数の視点から立体的に描くことでより鮮明なイメージや印象を読み手に伝える効果がある。

これを可能にするのは、俳句に設定された規則である。情景が入れ替わる位置（切れ）は、原則として (i) 5 文字目と 6 文字目の間か (ii) 12 文字目と 13 文字目の間 と決められている。更に切れの直前には、助詞「や」に代表される「切れ字」が付加され、標識として機能することも多い。規則を知っていれば、切れの前後で場面 A が場面 B に替わったことがわかる。仮に A と B が直接的に関連付けられないように思える情景であっても、読者は省略された部分を想像して、作者が伝えようとするメッセージを理解する。

では「取り合わせ」型俳句を他言語に翻訳する際、この視点を切り替える手法は、どのように扱えばよいのだろうか。ここでは事例研究として松尾芭蕉の『おくのほそ道』をとりあげる。

『おくのほそ道』は紀行文であり、その旅の目的は、古くから歌に歌われている名所旧跡を実際に訪れることであった。芭蕉は訪問地にまつわる故事などを思い出して俳句を詠むことが多く、 現実の情景と、芭蕉が心に思い浮かべる架空の情景が並列して置かれているような「取り合わせ」型俳句が一定数ある。英語のハイクでは、「切れ字」はダッシュ、コロン、省略符などで表現するのが一般的だが、句読法だけでは伝わらない場合もある。情景の入れ替わりを言語表現によって、的確に表す翻訳方略は他に観察されないのだろうか。

本発表では『おくのほそ道』に掲載されている「取り合わせ」型俳句について、複数の英語翻訳を比較し、結果構文や付加詞による表現といった言語形式による対応を分析する。

第１日（9 月 6 日）A 会場（W8E 101）　14:40 – 15:10
A-3　司会：長沼美香子

Translating the Texture of Time: Sand Metaphors in *Woman in the Dunes* Across Japanese, English, Bulgarian, and German

Vasilev Todor Ivanov (Kobe University D)

This paper examines the metaphorical significance of the sand in Kobo Abe's *Woman in the Dunes*, with particular focus on how it is rendered in translation across four languages: Japanese (original), English, Bulgarian, and German. Sand is not merely a setting or physical substance in Abe's novel - it actually becomes a central metaphor for time, erosion, entrapment, routine, and the gradual dissolution of individuality. Its omnipresence symbolizes both natural inevitability and psychological suffocation, making it a key element in the novel's existential landscape.

The study selects a focused set of metaphorical expressions involving sand and investigates how these metaphors are preserved, transformed, or lost in translation. Using frameworks from cognitive metaphor theory and literary translation studies, the analysis highlights how lexical choices and syntactic restructuring shape the philosophical tone of the narrative across languages.

JP: 砂は、底知れぬ時間のように流れ続けていた。(The sand kept flowing, like time without end.)
EN: The sand kept flowing endlessly, like bottomless time. BG: Пясъкът течеше безкрайно, като бездънно време. (The sand was flowing endlessly, as a bottomless time.)
DE: Der Sand floss weiter, wie eine endlose Zeit. (The sand continued to flow, like an endless time.)

In the English version, the metaphor is preserved with a rhythmic quality that mirrors the prose's philosophical cadence. The Bulgarian version intensifies the emotional weight and reinforces the futility and vastness of time. The German version is slightly flattening the metaphor with a nominalized phrase, softening the image's infinity and making it more abstract.

By comparing such passages, the paper demonstrates how each translation navigates the challenge of conveying metaphorical density without sacrificing cultural or linguistic naturalness. Sand, as a metaphor, places heavy demands on translators due to its multiple symbolic layers—concrete and abstract, sensory and philosophical.

The paper argues that while metaphor translation is usually interpretive, in a work like *Woman in the Dunes*, it becomes decisively existential. How each language renders the sand reflects its own cultural attitudes toward time, routine, and identity. The inclusion of German, alongside English and Bulgarian, enables a broader view of metaphor translatability across Indo-European languages and showcases how even subtle shifts in rendering can reframe the novel's core metaphysical tensions.

第 1 日（9 月 6 日）A 会場（W8E 101）　15:20 – 15:50
A-4　司会：飯田奈美子

重訳（relay translation）――「うさこちゃんシリーズ」（ミッフィー）を題材に

尹 惠貞（一橋大学）

重訳とは、ある言語を他の言語に訳し、その翻訳を用いてまた翻訳することを言う。アンデルセン童話がその良い例である。

Dollerup, Cay（2014）によれば、「重訳（relay translation）」とは目標言語のみならず、介在する言語も本物の読者に向けられたもので、かつ少なくとも三言語以上が関与するものをさす。これに対して同研究で Dollerup は、三言語が関与するが介在する言語が本物の読者に向けられてない翻訳を「間接翻訳（indirect translation）」としている。

2023 年度から、Dollerup の重訳の定義を用いて、絵本翻訳の書誌情報などで明らかにされない、もしくは曖昧な部分を翻訳者にインタビューする方法で、翻訳のメカニズムを明らかにすることに努めてきた。

本年度は、英語版ではミッフィー（miffy）と言われ、日本語版では「うさこちゃん」と翻訳されている「うさこちゃんシリーズ」（福音館書店刊）を中心に、一代目翻訳者石井桃子、二代目翻訳者松岡享子は既に亡くなっていることから、原文オランダ語を直訳作業し、松岡に訳文を提供していた翻訳者で作家である野坂悦子に2025年4月18日にインタビューを行った。そのインタビュー内容を紹介する。併せて、石井桃子は野坂のような協力者はいなかったので、オランダ語が解さず、どのように翻訳していたのか。また、松岡は野坂にどのように直訳文をお願いし、それをもとにどのように翻訳したのか。昨年までは、目標言語の日本語翻訳者にインタビューをしてきたが、今回は間の翻訳者の声から絵本「うさこちゃんシリーズ」を分析・考察する。

【参考文献】

Dollerup, Cay. 2003. Translation for Reading Aloud. *Meta, XLⅧ, 1-2*, 81-103.
Dollerup, Cay. 2014. Relay In Translation. *St. Kliminent Ohridski University Press.* 21-32.

大橋由香子（2024）『翻訳する女たち　中村妙子・深町眞理子・小尾芙佐・松岡享子』 etc.books
松居直（2008）『松居直のすすめる 50 の絵本』教文館
信陽道編集（2025）『誕生 70 周年記念　ミッフィー展』展覧会図録、信陽道

第 1 日（9 月 6 日）A 会場（W8E 101）　15:55 – 16:25
A-5　司会：飯田奈美子

インドネシアにおける日本文学翻訳の転換点：川端康成『雪国』の 3 訳をめぐって

岡田 莉子（東京外国語大学 D）

1942 年、日本軍はオランダ領東インドを占領し、文化政策の一環として文学・美術など 5 部門を管轄する宣伝機関を設置した。しかし、翻訳はプロパガンダの拡散を目的としたものに限定され、文学的価値に基づく紹介は乏しかった。そのため 1945 年の敗戦後、インドネシアにおいて日本文化の影響は一時的に姿を消す。1950 年代以降、日本文学の紹介は短編翻訳から再開され、1968 年の川端康成ノーベル賞受賞は関心を高める契機となる。

川端康成『雪国』は、インドネシアにおいて3度翻訳されている。1972年出版の *Negeri Salju*（雪国）と、1987 年出版の *Daerah Salju*（雪地方）、2009 年出版の *Daerah Salju*（雪地方）である。*Negeri Salju* はサイデンステッカーによる英訳 *Snow Country* を底本に翻訳され、1985 年版 *Daerah Salju* は原作を底本にして翻訳された。2009 年版 *Daerah Salju* は古典新訳の試みである。とりわけ注目すべきは、前二者が同一出版社から刊行されながらも、翻訳の出自―重訳か直接訳か―が異なることによって、読者の受容や解釈の様態に大きな影響を及ぼしている点である。

Negeri Salju は、川端の描く繊細な美が媒介言語を通すことで希薄化し、文化的含意が消失したとの批判を受けた。これに対し、1987 年版 *Daerah Salju* では脚注の追加や語彙選択の工夫を通じて、日本文化固有の感性への接近が試みられた。しかしそれもまた、注釈の限界や文化的比喩をインドネシア語でいかに再構築するかという問題に直面している。

本発表では、両翻訳に見られる語彙選択、比喩の変容、登場人物の関係性の描写といった表現上の差異に注目するとともに、それぞれの翻訳が生まれた時代背景―戦後の翻訳出版環境の変遷、翻訳者の立脚点―に焦点を当て、1970 年代から 1980 年代にかけての日本文学翻訳を考察する。

さらに 2009 年版 *Daerah Salju* において、いかなる解釈的刷新が加えられたのかを検討することによって、各翻訳がそれぞれの他者性にどう応答しうるのか、インドネシアという空間において日本文学がいかに位置づけられ、変容してきたかを総合的に論じる。

【参考文献】

川端康成（1980）「雪国」『川端康成全集　第 10 巻』新潮社.
―――（2006）『雪国』新潮文庫.
Kawabata, Yasunari. (1956) *Snow Country*. Trans. by. Edward George Seidensticker. C. E. Tuttle.
―――(1972) *Negeri Salju*. Diterjemahkan oleh Anas Ma'ruf. Pustaka Jaya.
―――(1987) *Daerah Salju*. Diterjemahkan oleh Matsuoka Kunio dan Ajip Rosidi. Pustaka Jaya.
―――(2009) *Daerah Salju*. Diterjemahkan oleh A.S. Laksana. Gagas Media.

第 1 日（9 月 6 日）A 会場（W8E 101）　16:30 – 17:30
A-6　A-7

「日本から発信する TS の未来」を考えるパネルディスカッション

内山 明子（クイーンズランド大学）、コックリル 浩子（クイーンズランド大学）、佐藤 美希（札幌大学）、佐藤＝ロスベアグ・ナナ（ロンドン大学 SOAS）、長沼 美香子（神戸市外国語大学）

日本通訳翻訳学会の発足から四半世紀が経過した。この間、世界におけるトランスレーション・スタディーズ（以下、TS とする）の発展はめざましく、その潮流にも変化があった。日本においても TS が学問分野として定着しつつある現在、日本を対象とする、および日本の研究者たちによる研究のさらなる可能性や、TS 全般への貢献の方向性を探ることには意味があるだろう。

発表応募者らは、国内外に拠点を置く TS の研究者たちによる「日本から発信する TS の未来」を考える共同研究を企画している。本発表は、まず現在の立ち位置を確認するために発表者が各々の視点から発言し、その内容について討論するパネルディスカッションの形式を取り、今後の TS の未来を見据えて、日本からはどのような「発信」の可能性があるかを検討したい。

発表内容は以下を予定している。一つには、まずイギリスを中心とした TS の現状を紹介したうえで、日本の TS の展開に、文化という観点からどのようなテーマへの期待があるかを話す。次にポップカルチャーを中心とするアニメ、漫画、ゲーム、そして文学にかかわる TS、また世界の不安定な情勢を受けての間文化研究という観点からの TS について話す。AI の到来も含めて、今後の課題についても語る予定である。

次に、生成 AI が席巻する時代の高等教育機関では、「翻訳教育」に対して一体何が求められているのかを考える。ここでは、限られた個人的な体験ではあるが、発表者自身が学生たちの翻訳についての学びから学んだ翻訳の理論と実践に焦点を合わせ、実際に使用した教材から得た知見を具体的に共有することを試みたい。

また、若林（2011）、Wakabayashi（2012）で既に課題が提起されていた「日本からの」TS という点についてもあらためて考えたい。英語が研究上の共通語として確固たる地位を持ち、ヨーロッパ中心主義的な思考が多くの場で批判されながらも（e.g., van Doorslaer and Flynn 2013）依然として強い影響力を持つと考えられる中で、日本人研究者や日本をめぐる翻訳の研究が担える役割について意見を交換したい。

さらに、日本国外で翻訳を研究、実践し、翻訳通訳教育にも携わる立場からの提言なども示したいと考えている。

【参考文献】

若林ジュディ（2011）「日本におけるトランスレーション・スタディーズの位置づけ」佐藤＝ロスベアグ・ナナ（編）『トランスレーション・スタディーズ』みすず書房、pp. 271-289.

Wakabayashi, J. (2012) 'Situating Translation Studies in Japan within a Broader Context.' In N. Sato-Rossberg and J. Wakabayasi (eds.) *Translation and Translation Studies in the Japanese Context*. Continuum, pp. 33-52.

Van Doorslaer, L. and Flynn, P. (2013) *Eurocentrism in Translation Studies*. John Benjamins.

第 2 日（9 月 7 日）A 会場（W8E 101）　9:20 – 9:50
A-8　司会：篠原有子

記号間翻訳としての可聴化：マッピングの理論的検討

藤本 未来（東京科学大学 D）、野原 佳代子（東京科学大学）

本研究は、記号間翻訳のひとつとして、非音声データを音に変換して情報伝達をする可聴化（Hermann, 2008）を取り上げ、数値データと音との間のマッピングがどのように行われているかを調査し記述を試みる。

記号間翻訳の定義は近年多様化している。Jakobson は、記号間翻訳を「非言語的記号体系の記号によって言語的記号を解釈すること」であると定義し(Jakobson, 1959)、Eco は翻訳を解釈属の一種であるとし(Eco, 2001)、詩や絵画への変換は、表現形式の比較は可能であるが等価性は不確実であると指摘している（Dusi, 2015）。筆者が実施したシステマティックレビューでは、記号間翻訳は①「意味づけする行為」②「ある記号体系からある記号体系への変換」③「“adaptation” や“multimodal translation”、“audio description”、“audiovisual translation”と同一もしくは包括する概念」④「新しい概念空間を創造する意味付け」として捉えられる傾向が示された(藤本, 2025)。可聴化は上記②の例としてみなすことができる。可聴化の核となるマッピングは、どのデータを、どのような音に変換するのかという選択である（Scaletti, 1994）。それは言語間翻訳における、言葉、構文、文化的要素をいかに別言語で表現するのかという問題と近似している。Vinay と Darbelnet の翻訳方略(Vinay & Darbelnet, 1995)を用いたマッピング記述の提案と、Lepri による可聴化を交渉行為として捉える研究(Spagnol & Valle, 2020)を踏まえ、可聴化のプロセスを整理する。

可聴化の目的とそれに応じたマッピング方法を翻訳理論、特に、Venuti による domestication と foreignization、Nord のスコポス理論に加え、翻訳の評価指標として用いられる Nida の dynamic equivalence としての fluency 及び formal equivalence としての accuracy (Nida, 1964)を適用し、マッピングが「聴覚的な自然さ」と「データの忠実な再現」の間でどのようにバランスをとり設計されているかを分析する。分析対象は、他研究者による既存の可聴化プロジェクトとし、マッピングのデータと音のドメインが明記されていること、マッピングの設計の意図が明記されていること、の 2 点を選定基準とする。特に近年活発に発表されている、宇宙データをソーステキストとして用いたデータ分析目的の可聴化プロジェクから選定する。

本研究は、可聴化行為を目的指向である翻訳判断と表現変換の枠組みでとらえ直しプロセスを記述するとともに、記号間翻訳研究に新たな議論の材料を提供することを目指す。

【参考文献】

Jakobson, R. (1959). On Linguistic Aspects of Translation. On Translation (pp. 232-239).

Dusi, N. (2015) "Intersemiotic translation: Theories, problems, analysis" Semiotica, vol. 2015, no. 206.

ECO, U, and Alastair McEwen. (2001) Experiences in Translation. University of Toronto Press.

藤本未来（2025）記号間翻訳の(再)定義と翻訳方略のためのシステマティックレビュー, 信学技報, vol. 124, no. 417, TL2024-30, pp. 1-7.

Hermann, T. (2008). Taxonomy and Definitions for Sonification and Auditory Display. Proc.ICAD

Scaletti, C. (1994) Sound synthesis algorithms for auditory data representation. In Gregory Kramer, editor, Auditory Display, volume XVIII of Santa Fe Institute, Studies in the Sciences of Complexity Proceedings, pages 223–252. Addison-Wesley, Reading, MA.

Vinay, J. P., & Darbelnet, J. (1995). Comparative Stylistics of French and English: A Methodology for Translation (p. 342). Amsterdam/Philadelphia, PA: John Benjamins Publishing Company.

Nida, E. A. (01 Jan. 1964). Toward a Science of Translating. Leiden, The Netherlands: Brill.

Spagnol, S., & Valle, A. (2020). Proceedings of the 17th Sound and Music Computing Conference. Zenodo.

第 2 日（9 月 7 日）A 会場（W8E 101）　9:55 – 10:25
A-9　司会：篠原有子

テレビドラマ『孤独のグルメ』の中国語字幕における異文化要素の翻訳：マルチモーダル談話分析の枠組みをもとに

庄 妍（神戸大学 D）

本発表では、映像作品のマルチモーダルな特徴に着目し、日本のテレビドラマに含まれる異文化要素が中国語字幕においてどのように翻訳されているかを考察する。具体的には、マルチモーダル談話分析の枠組みをもとに、中国語字幕における異文化要素の翻訳方略や異なるモード間のインタラクションを明らかにする。

映像作品の鑑賞スタイルは映画館から動画配信プラットフォームへと移行したことで、従来の字幕翻訳の時間的・空間的制約は大きく緩和された。翻訳者が字幕の中で異文化要素を説明する余地が広がり、画面上に注をつけることで言語的・非言語的な情報に対して補足説明を行うことも可能となっている。一方、弾幕は、画面に流れる視聴者によるリアルタイムコメントであり、動画視聴の感想だけではなく、字幕に対するコメントや背景知識の補足なども見られる。Díaz Cintas（2008）の分類に基づき、弾幕も字幕と同様に言語視覚モードに分類されると考えられる。したがって、動画サイトで提供される映像作品には、字幕、映像、音声セリフ、視聴者による弾幕などの複数のモードが相互作用している。

これまでの研究では字幕における異文化要素の領域分類や翻訳方略の傾向性（Pedersen, 2011）、注の機能（鄭, 2014）に関する分析が蓄積されている。また、Pérez-González（2019）をはじめとする弾幕に関する研究も見られるが、映像作品のマルチモーダルな特徴に注目し、モード間の相互作用を包括的に捉えた研究はまだ不十分である。

そこで本発表では、張（2009）が提唱するマルチモーダル談話分析の枠組みを援用し、日本の食文化に関わる異文化要素が多く含まれる人気テレビドラマ『孤独のグルメ』の中国語字幕を分析対象とする。異文化要素の翻訳方略とともに、各モードの相互作用を通じてそれらの要素がどのように伝達されているのかを明らかにする。

その結果、料理名などの異文化要素の字幕については、起点志向の翻訳方略を採用する傾向が見られた。また、画面に注をつけることで字幕を補足したり、映像内のメニュー、看板、地図における文字情報を訳したりすることが確認された。さらに、弾幕には字幕へのコメントやさらなる解釈に加え、映像内の視覚要素に関する補足説明が見られた。これらの傾向からは、中国人視聴者が日本の食文化に高い関心を抱いていることが窺え、翻訳者がその期待に応えることで日本の文化を積極的に紹介している可能性が示唆される。

【参考文献】

Díaz Cintas, J. (2008). Introduction: Audiovisual translation comes of age. In D. Chiaro, C. Heiss, & C. Bucaria (Eds.), *Between text and image* (pp. 1-9). John Benjamins.

Pedersen, J. (2011). *Subtitling norms for television: An exploration focussing on extralinguistic cultural references*. John Benjamins.

Pérez-González, L. (2020). From the "cinema of attractions" to *danmu*: A multimodal-theory analysis of changing subtitling aesthetics across media cultures. In M. Boria, Á. Carreres, M. Noriega-Sánchez, & M. Tomalin (Eds.), *Translation and multimodality: Beyond words* (pp. 94-116). Routledge.

鄭雁天（2014）「テレビドラマの日本語字幕における注の機能主義的分析―中国宮廷ドラマ『歩歩驚心』を例に―」『通訳翻訳研究』第 14 号：53-73.

张德禄. (2009). 多模态话语分析综合理论框架探索. *中国外语* (1), 24-30.

第 2 日（9 月 7 日）A 会場（W8E 101）　10:30 – 11:00
A-10　司会：篠原有子

The evolution of amekomi translations in Japan: Interplay of foreignization and domestication strategies

Maurice Alesch (Kyoto University)

While there has been much research into the localization of Japanese manga around the world, the same cannot be said in reverse. This presentation will look at the evolution of Japanese translations of American superhero comics, often abbreviated as *amekomi* in Japanese, since 1948, which according to Ono (Hajdu, 2012, p. 414) appears to be the year when the first American superhero comics were translated into Japanese.

In terms of language, the translations adopt somewhat rigid role language with many female characters using women's language, and there seems to not have been too much change over the years. However, in order to fully understand localization practices it is important to not only examine the text but also the formats and publishing practices. Rota (2008, p. 83) argues that formats constitute a "fundamental creative element" of comics that influences their perception. She also goes on to draw upon Venuti's (1995) concepts of domestication and foreignization to explain differing publishing strategies.

In the case of Japanese translations of American comics, it appears that they were initially published for a short while in the original US format in the 1940s before resurfacing in a format closer to Japanese publishing conventions in the 1970s. From the 1990s onward they once again started adapting formats closer to the US market. While the 1970s practices might have been an attempt to make the translations accessible to a wider public, the recent formats suggest a shift in focus toward a more niche audience who prefers a more foreignized format.

This research will try to identify and analyze those changes by looking at a selection of translations from various decades, including anthology magazines and collected trade paperbacks, partly consulted at the Kyoto International Manga Museum and partly purchased from secondhand bookshops. Where relevant, it will also refer to accounts from translators involved in the process.

Hajdu, D (2012) *Yūgai komikku botsumetsu! Amerika wo kaeta 50 nendai "akusho" gari* [The Ten-Cent Plague: The Great Comic-Book Scare and How It Changed America], Nakayama, Y and Ono, K. (Trans.). Iwanami Shoten. (Original work published in 2008).

Rota, V. (2008) Aspects of Adaptation: The Translation of Comics Formats. In F. Zanettin (Ed.), *Comics in Translation* (pp. 79-98). Routledge.

Venuti, L. (1995) *The Translator's Invisibility: A History of Translation.* Routledge.

第 2 日（9 月 7 日）A 会場（W8E 101）　11:10 – 11:40
A-11　司会：北代美和子

異質なる闇の受容：*The Cthulhu Casebooks* Series の日本語訳と台湾華語訳を例に
余 玟欣（神戸大学）

本発表は、探偵小説の典型である『シャーロック・ホームズ』シリーズ（*Sherlock Holmes* Series）とクトゥルフ神話を融合させたジェイムズ・ラヴグローヴ（James Lovegrove）による『クトゥルー・ケースブック』シリーズ（*The Cthulhu Casebooks* Series）に着目し、その日本語訳（日暮雅通訳『クトゥルー・ケースブック』）と台湾華語訳（李函訳『克蘇魯事件簿』）を文化翻訳（cultural translation）の視点から比較検討するものである。

アンソニー・ピムは、『翻訳理論の探求』において、さまざまな理論や事例を引用しつつ、翻訳の本質は単なる語彙の交換ではなく、またテクストとして固定されているわけでもないアプローチが存在し、それが文化の移動と適応のプロセスにあると述べることで、文化翻訳の多様な側面を指摘している（Pym [2010] 2023=2010: 237-269）。このように翻訳は、異文化テクストの受容における態度や方法を反映し、文化的要素の表現や再構築に関わる問題を内包している。特に *The Cthulhu Casebooks* Series のように、英国ヴィクトリア朝の文化を背景とする『シャーロック・ホームズ』シリーズと、アメリカの大衆文化を起源とするクトゥルフ神話という、二重の文化的特殊性を有するテクストにおいては、この視点は一層重要となると考えられる。

本発表では、日本語訳と台湾華語訳がそれぞれの文化圏において、クトゥルフ神話という異質な要素をいかに受容し、『シャーロック・ホームズ』の探偵小説的要素とどのように融合させているかを分析する。その際、テクスト内の表現や用語の選択、翻訳上の工夫や翻案の程度に着目する。また、翻訳者が原作の持つ文化的特殊性をいかに保持しているか、または読者層に適合させる形でいかに変容させているかを比較検討する。たとえば、人名や地名、クトゥルフ神話に特有の語彙、ヴィクトリア朝の習慣や社会的背景といった文化的要素がどのように翻訳されているかを具体的に示し、その共通点と相違点を明らかにする。

本発表では、まず、文化翻訳理論の概要を示し、次に具体的な翻訳テクストの分析を行う。最後に、両翻訳における異文化的要素の調整・適応のあり方を考察し、翻訳という営みが単なる言語的現象ではなく、文化間の交流および交渉のプロセスであることを論じる。さらに、東アジア圏における『シャーロック・ホームズ』シリーズとクトゥルフ神話の受容形態が示す文化翻訳的特徴の解明を試みる。

【参考文献】
アンソニー・ピム著、武田珂代子訳（2010）『翻訳理論の探求』みすず書房

第 2 日（9 月 7 日）A 会場（W8E 101）　11:45 – 12:15
A-12　司会：北代美和子

モンゴル語聖書の神の訳語をめぐって
北村 彰秀（モンゴル聖書宣教会）

聖書の現代モンゴル語訳においては、神の訳語をめぐって、モンゴルで使われてきた用語を使うべきかどうかということで激しい意見の対立があった。これについては、滝澤(2015)に詳しいが、年月の経過とともに、ボルハンというモンゴル語を主張する側が優勢となり、論争は落ち着いてきた。(ただし、少数派も依然として存在する。)そこで現在、この論争は何だったのか、双方の主張の問題点は何だったのか、改めて検討しなおす時期が来ているといえよう。

まず、ボルハンという語は仏の意味もあり、神の訳語としてはふさわしくないという意見があった。しかしこれについては、どのような民族も、新しい宗教、哲学、思想等を受け入れる際、すでに知っている語彙によって理解しようとするという現実に目をむけるべきであろう。現地語の神を意味する語を用いることにはいつも反対勢力があるが、わかりやすいという事実はある。

ボルハン否定派が主張した Yo'rto'ntsiin Ezen (ヨルトンツィーン・エゼン)という表現が、かなり長いものであることも、この表現が退けられた一因であるに違いない。このことはあまり注目されてこなかったが、例えば最近の日本では、ロシア文学者の亀山郁夫が、翻訳を読みやすくするために、固有名詞を短くして訳していることも注目される。

また、ボルハン否定派が主張した Yo'rto'ntsiin Ezen (ヨルトンツィーン・エゼン) という表現は「世界(あるいは宇宙)の主」という意味であり、英モ辞典からとった表現であることも忘れてはならない。辞書というものは訳語を提示するのみならず、語の説明をあげることもある。たとえば、

state 米国の行政区画、州

のような例をあげることができよう。ここで「州」という言い方は翻訳の際に用いることができるが、「米国の行政区画」という表現は、訳語としては使うことができない。辞書中の「訳語」と「説明」の区別に注意を払わないと、理解不能の訳、あるいは不自然な訳が生まれてくる。

以上、第二、第三の点ついては注目されてこなかったが、これらも訳語選択に影響を及ぼしてきたことは明らかであろう。

【参考文献】
滝澤克彦 (2015)『越境する宗教――モンゴルの福音派』 新泉社　111-132.
Nida, E (1947) *Bible Translating.* American Bible Society: New York. 204-207.

第 2 日（9 月 7 日）A 会場（W8E 101）　13:15 – 13:45
A-13　司会：古川弘子

日本語の文字（種）の書き分けによる言葉遊びの翻訳：村上春樹（著）「夜のくもざる」をケーススタディとして

山木戸 浩子（藤女子大学）

言葉遊びは、言語本来の機能である伝達を目的とするのではなく、言葉の持つ音の類似性、多義性などを巧みに用いて、意図的に面白さを引き出すのに有効であるが、翻訳において言葉遊びをどのように扱うかという問題は大変興味深い（Qvale 1995, Delabastita 1996, Marco 2010, 他）。本発表では、村上春樹（著）のショートショート「夜のくもざる」（1995）の翻訳を考察することによって、この問題について考える。

登場人物は「私」と「くもざる」のみであり、1 ページ半の短いストーリーの中で、「私」が言ったことをくもざるが真似して言うやり取りが計 7 セット続く。くもざるの真似は、音声において「私」が言ったことと同一であるが、時に異なる表記が使用される。例えば、全てひらがなで書かれている「私」の文がカタカナで書かれたり、漢字の語句が同音異義語に置き換えられる。前者は文全体に無機質な印象を作り出し、後者はタイピングの誤変換として出てくるような漢字の使用により、文全体に何かちぐはぐ感が表現され、滑稽である。こういった文字（種）の操作による表現の言葉遊びは、日本語のように同音異義語が多く存在し、漢字、ひらがな、カタカナの三つの文字種を使い分ける言語であれば容易であろうが、翻訳ではどのように対応されるのか。

この作品の翻訳は、韓国語版（2003）、中国語簡体字版（2012）、中国語繁体字版（1996）、ロシア語版（2011）が出版されており（2025 年 5 月 31 日現在）、言葉遊びの要素は様々な方法で対応されている。韓国語とロシア語は表音文字 1 種しか持たないが（それぞれハングル文字、キリル文字）、どちらの翻訳版においても、原文と意味が多少異なりつつも、言葉遊びがもたらす効果の創出を優先している。例えば、全てカタカナで書かれた文に対して、韓国語版では（作品におけるデフォルトの書体とは異なる）ゴシック体で表記し、ロシア語版でも文を全て大文字で書くことによって、表記スタイルの違いによる面白さを表現している。一方で、表語文字である漢字 1 種のみを使用する中国語の翻訳版では、原文の意味の保持に極めて努めていることが窺える。起点テクストの同音異義語による置き換えは逐語訳され、簡体字版では脚注で「日本語でこれらは同じ発音」と説明されていた。この翻訳のテクニックの違いは、中国語の文字タイプの性質に因るのかについて考えると共に、言葉遊びの効果を優先する訳出の可能性についても探っていきたい（柴田、他 2009）。

【参考文献】

Delabastita, D. (1996). “Introduction.” *The Translator: Studies in Intercultural Communication (Special Issue, Wordplay and Translation)*, 2(2): 127-139.

Marco, J. (2010). “The translation of wordplay in literary text: Typology, techniques and factors in a corpus of English-Catalan source text and target text segments.” *Target* 22(2): 264-297.

村上春樹（1995）「夜のくもざる」『村上朝日堂超短篇小説 夜のくもざる』(pp. 103-107) 平凡社

Qvale, P. (1995). “Wordplay and Foul Play.” *Perspectives: Studies in Translation* 3(2): 221-234.

柴田元幸・沼野充義・藤井省三・四方田犬彦（2009）『世界は村上春樹をどう読むか』文藝春秋

第 2 日（9 月 7 日）A 会場（W8E 101）　13:50 – 14:20
A-14　司会：古川弘子

英語映画の日本語字幕に見られる文末詞によるジェンダー的性格の強調に関する分析
永岡 由之 （東京科学大学 M）

日本語において、女性らしさを強く表現する役割語としての「女性語」は、19 世紀後半に確立されたものである（古川, 2013）。その成立には男性が大きく関与していたことから、女性語は男性の社会的優位性を反映していると指摘されている（今西, 2006）。女性語の多くは、日常生活の日本語では使用されることが少ないにもかかわらず、英語映画や洋書などの翻訳作品においては頻繁に用いられている（古川, 2023）。こうした背景を踏まえ、翻訳における女性語の使用の適否について、「女ことばは、『女は女らしく』という規範を再生産するものである」（平野, 2023）といった批判的見解も存在している。
本研究は、1980 年以降に製作された現代映画を対象に、日本語字幕における英日翻訳で使用される女性語に着目するものである。字幕日本語では、原文（ソーステキスト：ST）の内容を大幅に簡略化してでも、女性語を使用する場合も多い。訳文である日本語字幕（ターゲットテキスト：TT）と、原文である英語の台詞（ST）を比較することで、女性語の使用実態を分析する。
具体的には、以下の 2 点を研究課題として設定する。
1）翻訳作品における映画字幕では、どのような種類の女性語が、どのような状況で使用されているのか。
2）日常会話ではほとんど使用されない種類の女性語の、翻訳作品での使用背景には何があるのか。
Okamoto と Sato（1992）によれば、日本語の文末詞（Sentence-final Particles; SFPs）は、話者のジェンダー的性格を強く反映する。そこで、本研究ではとくに文末詞に注目し、日本語字幕の書き起こしを行ったうえで、文末詞の使用傾向、それを使用する話者、ならびにその文末詞が男性的か女性的かに着目して共起分析を実施する。この分析を通じて、どのような映画の場面や原文の英語表現において、ジェンダー色の強い文末詞が出現しやすいのかを調査する。
本研究は、映画字幕における女性語の使用実態を明らかにすることを通して、ST において「女らしさ」がさほど強調されていない場面であっても、TT において女性語が出現しやすいという傾向を実証的に示す。TT における女性語の出現例と ST における表現を、映画の登場人物や具体的な場面に結びつけることで翻訳における女性語の使用背景を考察し、今後の女性語の使用について考える契機としたい。

【参考文献】
Okamoto, S. & S. Sato. (1992). Less Feminine Speech among Young Japanese Females. In K. Hall et al. (Eds.), *Locating Power: Proceedings of the Second Berkeley Women and Language Conference*, April 4 and 5, （Vol.1, pp. 478-488). Berkeley and Calif: Berkeley Women and Language Group.
今西佑子（2006）「英語・日本語に共通する「女言葉に反映される女性観」：‘Politeness’との関連性」『Language & literature (Japan)』第 15 号: 13-20.愛知淑徳大学大学院英文学会
平野卿子（2023）『女ことばってなんなのかしら -「性別の美学」の日本語』.河出新書
古川弘子（2013）「女ことばに起因する翻訳の問題」『翻訳研究への招待』第 9 号: 1-17.日本通訳翻訳学会
古川弘子（2024）『翻訳をジェンダーする』.ちくまプリマー新書

第 2 日（9 月 7 日）A 会場（W8E 101）　14:25 – 14:55
A-15　司会：古川弘子

表象的に再現するもの：吹き替え翻訳に関わる創造的プロセス

Samara Mabelli Ferreira Andrade（神戸大学 D）

映画的ディスコース(telecinematic discourse)は、画面上での登場人物間のコミュニケーション（物語世界内：diegetic）と同時に画面外では視聴者に向けてコミュニケーション（物語世界外：extra-diegetic）を成立させる、視聴覚テクストにおいて二つの次元で起きる視聴覚コミュニケーションである(Piazza et. al. 2011)。その全体的な意味は、視覚と聴覚の二つのチャンネルを同時に通し、調和的に相互作用する多記号コードによって形成される。視聴覚翻訳では、それらのコードによる体系化されたメッセージを解読し、記号的に転移するプロセスが行われる（藤濤 2007, Chaume 2013）が、ほとんどの場合に言語コードが唯一の操作可能なコードである（Ferriol 2021）。

吹き替え翻訳は、原作の音声発話を目標言語の音声発話に置き換えることで、言語コードとパラ言語コードを操作し、目標文化の視聴者にとって原作との同様な印象やレトリックの効果を与えるため、文体を完全に再構築する視聴覚翻訳の一形態である（藤濤 2007, Chaume 2016）。高い生産コストのため、吹き替えは初期に、費用を負担できる規模の独裁体制の国々で導入された(Pavesi 2019)が、近年では視聴形態の多様化が進み、視聴者側に視聴方法を自由に選ぶ権利が与えられ(Chaume 2016)、伝統的に字幕が主流の国々でも吹き替え版の制作が重視されてきた。

本研究の目的は、①映画の原作でレトリック的表現が果たす役割と、それらの表現が吹き替え翻訳においてどのように再現されているかを明らかにすること、②訳出の方法が、視聴覚テクストにおける二つのコミュニケーションの次元にどのような影響を及ぼすかを検討することである。具体的に、原作と吹き替え版におけるレトリック的表現の言語面と非言語面を比較し、翻訳特徴の傾向および含意的意味の成立要因を分析し、示す。本発表では、日本語、英語、ポルトガル語の三言語を対象に、事例を紹介し、レトリック的表現の訳出に関わる多記号コードの役割と、それによる潜在的なレトリックの効果について考察する。レトリック的表現とは、コミュニケーションの場において、レトリックの効果を達成するために巧妙に操作された表現手法（隠喩、擬人化、皮肉など）を指す。こうした表現は、我々の経験や社会・文化的背景知識に基づいて生み出されており、異文化や同一文化内の下位集団によって異なる可能性がある（Kövecses 2005）。したがって、翻訳においては、創造的なプロセスを通じて特定の文化や社会を反映する形を取ることが見られる。

【参考文献】

Chaume, F. (2013). The turn of audiovisual translation: New audiences and new technologies. Translation Spaces 2, 107-125. https://doi.org/10.1075/ts.2.06cha

Chaume, F. (2016). Audiovisual Translation Trends: Growing Diversity, Choice, and Enhanced Localization. In A. Esser, M. Á. Bernal-Merino, & I. R. Smith (Eds.), Media across borders: Localizing tv, film, and video games (pp. 68-84). Routledge.

Ferriol, J.L. (2021). An empirical and descriptive study of the translation method for dubbing and subtitling. Linguistica Antverpiensia, New Series – Themes in Translation Studies, 6, 171-184.

藤濤 文子. (2007).『翻訳行為と異文化間コミュニケーション―機能主義的翻訳理論の諸相』松籟社.

Kövecses, Z. (2005). Metaphor in Culture: Universality and Variation. Cambridge: Cambridge University Press.

Pavesi, M. (2019). Dubbing. In Baker, M., & Saldanha, G. (Eds.), Routledge Encyclopedia of Translation Studies (3rd ed., pp.156-161). Routledge.

Piazza, R., Bednarek, M., & Rossi, F. (2011). Telecinematic discourse : approaches to the language of films and television series: Vol. new ser., 211. (1st ed.). John Benjamins Pub. Co.

第 2 日（9 月 7 日）A 会場（W8E 101）　15:05 – 15:35
A-16　**司会：大久保友博**

翻訳研究における人類学的方法論の可能性と課題

鋤柄 史子（神戸大学）

本発表は、メキシコ先住民作家の文学実践に関して行なった研究を基に、翻訳を考察するうえで人類学の領域で培われてきた方法論が提起しうる有効性とその課題について議論する。研究は、社会人類学専攻博士後期課程在籍時（2020.9-2025.2）に行なったものであり、チアパス州サン・クリストバル・デ・ラスカサス市をフィールドとし、マヤ系ツォツィル語族の文芸作家たちが主体である。

研究では二つの側面から翻訳について考察した。一つは、二言語間における意味生成と変容という翻訳の過程そのものの働きについて、もう一つは、文字（モノ）としての性質、つまり空間的領域かつ時間的領域を越境しながら作品が解釈されることを可能とする性質についてである。両者について理解するために、テクスト分析を行うとともにフィールドワークを行い、文学と人類学の領域横断的な方法論を用いて先住民の文学実践にアプローチを試みた。9ヶ月間のフィールドワークでは主に、主体への対話的なインタビュー、先住民作家を対象とした文学ワークショップへの参加を行なった。インタビューでは、ツォツィル語とスペイン語間で行う翻訳（自己翻訳）の経験や、翻訳を創作活動とは別に行わざるをえない苦悩や課題、そうした現状を生み出している言語間の不均衡な関係性をふまえたうえでマイノリティ言語で文学を実践すること、などについて約25名の作家に聞き取りを行った。

以上の経験をふまえて、本発表では翻訳実践の研究における文学と人類学の領域横断的方法論に関して議論するが、とくに以下の点を取り上げる。（1）本研究の一つの成果として、翻訳の実践者でありマイノリティ言語話者である主体の視点を前提とした考察を行うための一つの方法論を提起できたことが挙げられる。この意味で人類学的アプローチは、マイノリティ言語から／への翻訳の現場をより明確に可視化する一つの有効な手段となり得る。（2）今後の課題としてあげられるのが、研究の主体である作家の声を尊重すること（人類学における倫理観）と作品が作家の手を離れて獲得する解釈の拡がりについて議論すること（文学における作品論）との間でときに生じる矛盾に、どのように取り組むべきかということである。研究者としての責務をふまえて、両者の間でバランスを維持するための重心をどこに位置づけるか、議論の余地があると考えている。

第 2 日（9 月 7 日）A 会場（W8E 101）　15:40 – 16:10
A-17　司会：大久保友博

キケローの翻訳思想

藤本　時子　（近畿大学工業高等専門学校）

古代ローマの政治家・弁論家・哲学者・キケローは、ギリシア哲学書や修辞学書をラテン語に翻訳する過程で、多数のラテン新造語を創出し、母語による哲学的思考と新たな表現の可能性を切り拓いた。特に、多種多様な概念のギリシアの専門用語をラテン語で表す過程で、概念の表現法を磨き上げローマ固有の道徳語を創造した。その翻訳活動は言語的作業にとどまらず政治的実践にも深く関与した。翻訳で生まれた心の琴線に触れる表現は、弁論では聴衆の感情を動かし、注意を引き、行動を促すのに有効な修辞戦略となった。つまり翻訳という知的営為を、政治弁論を有利に展開する実践的武器へと昇華させた。従来の研究でも、キケローの翻訳がローマ思想やラテン文体に影響を与えたことは認められているが、その翻訳活動が政治実践や弁論術と結びつき、言語的表現が修辞的効果をもって活用された点については分析の余地が残る。

キケローは翻訳理論について *De finibus* (1,10) で、ラテン語は貧弱どころかギリシア語よりも豊かな言語であり、哲学用語の新造にも適すると述べ、自身の語彙力や翻訳による表現力の研鑽が同時代のローマ人の創作活動にも影響を与えたと述べる (Cf. *De natura deorum* 1,8)。また「新しい内容に新しい名を」(*De fin.* 3,3) という翻訳方針のもと、ἀρετή などギリシア哲学用語を一般のローマ人にも想像しやすい virtus などで表現した。ローマ人にとっての「徳」とは、戦争や論争に勝つ勇敢さを含む包括的概念であり、その翻訳を通じてローマ人に美徳が究極的には家庭や個を超えて公共＝国家への貢献に至るという新たな倫理的枠組みをローマ社会に提示し、美徳の理想を再定義した。こうした各ラテン概念語の創出にとどまらず、パラグラフ単位の思想構造全体の翻訳へと昇華させ (Cf. *De optimo genere oratorum* 5), ラテン語の思考体系そのものを変革した。Jones の指摘では、キケローは散文・韻文という原文の性質に応じて翻訳法を巧みに使い分けており、本発表ではその中でも特に散文翻訳法に焦点を当てる。

キケローは、ギリシア発祥の哲学概念を基にしつつ、ローマ人特有の価値観を加味した新たな表現法を創造することで、ギリシア文化の模倣から脱却し、独自のローマ文化的アイデンティティを形成した。その翻訳理論と実践法は、古代における言語・思想の発展の礎となり、後世の知的伝統や翻訳理論にも深い影響を及ぼしている。本発表では、キケローの翻訳活動を通して言語・哲学思想・政治の交差点を探り、その意義を再検討する。

（本研究発表は JSPS 科研費 JP25K04006 の助成を受けて行うものです。）

【参考文献】

1) Jones, D.M., *Cicero as a translator*, Retrieved from: https://repository.royalholloway.ac.uk/file/880c861c-d1f0-4a01-a29e-1463b17b547c/1/10097154.pdf
2) Maggi, L. Ut Orator. A Framework for Translating Cicero. Retrieved from: https://www.academia.edu/93230693/Ut_Orator_A_Framework_for_Translating_Cicero_Conference_Communication_Translating_Cicero_February_25_2022
3) 高畑時子、「キケロー著『弁論家の最高種について』(Cicero, *De optimo genere oratorum*) 解説と全訳および注釈」、in:『翻訳研究への招待（日本通訳翻訳学会篇)』、第 12 巻、2014, pp.253-265.

第 1 日（9 月 6 日）B 会場（W8E 307）　13:30 – 14:00
B-1　司会：稲生衣代

大学の授業における通訳の評価に対する取り組み
西畑 香里（東京外国語大学）

大学で開講されている通訳関連の授業には、通訳の実践を通して学ぶ実技科目が多くあるが、通訳の評価についてどのように授業に取り入れるかについては参照できる具体的な情報は少なく、教員にとって難しい課題があると考えられる。課題の例として、授業の中で通訳の評価を行う場合に、通訳の評価項目をどのように設定するのか、誰の視点から誰が評価を行うのか、どのような目的で評価を行うのか、評価の対象範囲をどこに設定するのか、などが挙げられる。

まず、通訳の評価項目については、通訳の種類、状況、目的、場面などにより何が重視されるかは異なり、授業で使用することを考慮した際に、唯一の絶対的な評価項目が確立されているわけではない。また、誰の視点で誰が評価を行うかについても、通訳実務の現場では、クライアント、スピーカー、参加者、エージェント、同僚の通訳者、通訳者自身などの様々な立場があり、授業内においても、教員、クラスメイト、受講生自身、場合によってはその他の参加者などが挙げられる。誰が評価をするのかに関連して、評価を行う目的としては、点数をつけることや、合否を判定するような試験のための評価なのか、または良い通訳とは何かを考えるきっかけを受講生に提供するための評価なのかによっても授業での扱いは異なる。さらに、評価をする際の対象範囲として、通訳行為そのものだけに限定した評価とするのか、通訳者のあり方としての評価とするのかによっても、評価を行う側が意識を向けるべき点は異なる。

本発表では、2016 年より 2025 年に至るまで実践を行った通訳関連授業の中で、通訳に対する評価を授業内での活動としてどのように取り入れてきたかの試みを事例として取り上げ、これまでの取り組みの中で得られた気づきを共有するものである。また、参考になると考えられる先行研究の例や通訳実務の視点、大学・大学院であるからこそ実施が可能であると考えられる通訳教育のあり方にも言及する。

第 1 日（9 月 6 日）B 会場（W8E 307）　14:05 – 14:35
B-2　司会：稲生衣代

通訳行為における「共在 co-presence」への達成：盲ろう者に対する触手話技能の考察から
飯田 奈美子（関西外国語大学他非常勤講師）

「共在 co-presence」（Goffman1963）とは，同じ状況に居合わせた複数人が互いに知覚的・視覚的焦点を維持しようとすることである．「共在」があるということは他者との相互作用に関与せざるをえないということであり，そこでの身体的・言語的行動は一定の表出意味を発することになる．通訳実践において，通訳者は，要通訳者同士を「共在」の場に引き合わせ，その場のコミュニケーションの目的達成にむけて行われる秩序性を日常的に慣習化された振舞を通じて再構成させていく役割を担う．特に，盲ろう者に対する通訳行為においては，要通訳者同士を「共在」させるために様々な働きが必要となる．視聴覚の両方に障害を併せ持つ盲ろう者は通訳・介助支援がないと，眼前の発話者の発話内容がわからないだけでなく，非言語的情報も喪失することで「感覚的情報の文脈」を失い，「文脈のない認識空間に＜裸＞で放り出された」（福島 2011）状態になってしまう．従って，通訳・介助支援は発話内容の伝達だけでなく，感覚的情報の文脈を補完することで，盲ろう者を「文脈に参与」させる重要な役割を担っている．しかし，盲ろう者が「文脈に参与」することができる通訳・介助支援について，詳細なデータに基づいた検討は十分になされていない．そこで，本研究では，通訳・介助者による触手話技能の考察から，通訳・介助者がいかに，盲ろう者を「文脈に参与」させる働きを行っているかを考察し，通訳行為における「共在」の意義を考察する．

研究方法は，通訳・介助者の触手話を介して盲ろう者へのインタビューを行い，それをビデオカメラで撮影し，社会学エスノメソドロジー・会話分析にて分析を行った．

今回，注目した現象は，通訳・介助者が触手話で盲ろう者に対して行う「確認行為」である．盲ろう者の発話内容は理解しており，訳出もできているが，盲ろう者の手を取り，訳出内容を盲ろう者に伝える行為が観察された．この行為は訳出内容を盲ろう者に知らせ，訳出内容の確認を行うと同時に，TCU の完了可能点を知らせ，順番交代をスムーズに行わせる働きがあることが分かった．このような通訳・介助者の技能は，盲ろう者を「今，ここで」行われている相互行為にあたかも直接的に相互モニターできるように働きかけ，相互行為の秩序性の再構築に関与させるものである．このような通訳技能によって，盲ろう者がその場の参与者とともに「共在」することが可能となることが明らかになった．

【参考文献】
Goffman, Erving (1963). *Behavior in public places: Notes on the social organization of gatherings*. New York: Free Press.
福島智,2011,『盲ろう者として生きて―指点字によるコミュニケーションの復活と再生―』明石書店

第 1 日（9 月 6 日）B 会場（W8E 307）　14:40 – 15:10
B-3　司会：稲生衣代

外国語（英語）習得を主たる目的としない大学通訳プログラムにおける同時通訳インターンシップ制度の確立と運営：国際基督教大学 8 年間の道のりと今後の課題

田村 智子（国際基督教大学）

1960 年代に開始した日本での通訳者養成は、当初一握りの大学を除き民間訓練校が担っていたが、その後通訳科目を開講する大学数が増加、今世紀初頭には 105 校 139 科目（染谷ら, 2005）、以降も通訳科目は一定数開講され続けているが、その主たる目的が外国語（英語）習得であることは 2005 年時より更に顕著化（高橋ら, 2022）、欧州等大学院での両言語が母語又は母語レベルを前提とする通訳訓練との違いも指摘されてきた（武田, 2012）。国際基督教大学は 1960 年代から通訳者養成を行ってきたが、語学としての英語・日本語の履修は完全別個に行われるため、通訳科目履修生は既に両言語が母語又は母語同様である者が多く、通訳訓練的には理想的かもしれぬ一方、それゆえの特異な問題も多い。その一つが学生への同時通訳業務の要請である。通訳履修生を含め本学には「バイリンガル」と呼ばれる学生が多く、またその多くが、a）英語が主言語で、b）幼少期からアドホック通訳を日常のように行っている。また本学は全ての業務や情報提供を日英両言語で行い言語権の保証を図っているため、学内行事の多くが、留学生や一部の教員等日本語を解さない参加者のために「日英」方向で要通訳となり、その殆どを通称「バイリンガル」の学生に依存してきた。多くが「同時通訳」で、無償又は都の最低時給レートに近い報酬という条件で、その仲介依頼は通訳担当教員に常時寄せられ、大学側・教員側からの「無報酬・僅少報酬での学生への同時通訳依頼」という制度的力関係の問題（Mason, 2015）も所見された一方、ほぼ未訓練での同時通訳等、通訳翻訳学的には「重篤合併症」のような状態が恒常化、2017 年の職の拝命時からその是正が喫緊の課題となった。本発表では、その是正のためにどのような障害に直面し、どのような打開策を講じてきたか、そして今後に向けての課題は何か、について論ずる。また本学ではあくまで日英の言語ペアが対象であるが、既述の通り日本の大学における「通訳」教育の殆どが英語教育の延長上にある一方で、近年は通訳科目履修希望者の言語的・文化的多様性も加速度的に高まっており、英語以外の言語と日本語とのアドホック通訳を幼少期から行ってきた通訳履修生も増えつつあることを鑑みると、本発表での情報共有や質疑応答での更なる議論の深まりは重要であると考える。

【引用文献】

Mason, I. (2015). Power. In F. Pöchhacker (Ed.), *Routledge encyclopedia of interpreting studies* (pp. 314–316). Routledge.

染谷泰正・斎藤美和子・鶴田知佳子・田中深雪・稲生衣代（2005）「わが国の大学・大学院における通訳教育の実態調査」『通訳研究』第 5 号：285–310.

高橋絹子・大井川朋彦・石塚浩之・稲生絹代・内藤稔（2022）「日本の大学・大学院における通訳関連科目に関する全国調査報告」『通訳翻訳研究』第 22 号：91–112.

武田珂代子（2012）「日本における通訳者養成に関する一考察」『通訳翻訳研究』第 12 号：105–117.

第 1 日（9 月 6 日）B 会場（W8E 307）　15:20 – 16:20
B-4 B-5

通訳者に対する社会の認識の変化（追跡調査）

高橋 絹子（関西大学）、木村 護郎クリストフ（上智大学）、内藤 稔（東京外国語大学）、岩崎 修子（関西大学）、田中 鞠安（関西大学）

本研究は、通訳者に関する社会の認識の変化を調査する目的で実施しているものである。先行研究では、木村他（2024）で、第 1 回目の東京オリンピックから第 2 回目の間の約 50 余年に、英語学習者を対象とした雑誌の目次に「通訳」という語がどれくらい取り上げられているのかという調査を実施している。また高橋他（2025）では、同じ期間において、新聞報道と通訳者になるための指南書の中に見る認識に関する報告を行っている。

本報告では、この 2 つの先行研究の 3 つの追跡調査の結果を扱う。まず1つ目は、雑誌の調査である。木村他（2024）では、雑誌の調査の対象が 2003 年以降のみであったため、1976 年の発刊時から 2003 年までの間において、「通訳」がどの年代にどのように扱われているか調査を実施した。その結果、1992 年と 2000 年に通訳に関する特集が集中していることが判明した。

2 つ目は書籍の調査である。この期間にすでに調査を実施した指南書以外で、通訳に関する書籍がいつごろ、どの程度出版されたかということを調査した。その結果、1992 年と 2001 年に他の年と比較して出版が突出して多いことが判明した。これは雑誌の特集が多い時期とほぼ一致していた。

さらに 3 つ目として、インタビューの実施である。高橋他（2025）の指南書の分析に基づき、それぞれの時代に当事者である通訳者自身は、通訳者をどのようにとらえていたのかということを調査するために、1970 年代に社会に出た通訳者にその認識を尋ね、結果を分析した。1 つの要因として、1970 年代には、まだ女性が活躍できる職業の選択範囲が狭く、特に言語を得意としてそれを活かせる職業があまりなかったという点があげられた。つまりこの当時は、「通訳者」というのは「語学が得意な女性がつく職業」と認識されていたと言えるであろう。では、現代ではこの認識は、どうであろうか。2026 年に社会に出る言語を専攻する大学生を対象に、職業選択に関してインタビューを実施した。その結果、企業内で外国語を活かすことのできる募集が多く、敢えて大変そうな通訳者という職業を選択せずとも、英語力を活かすことができるということであった。「敢えて挑戦する必要がない職業」と認識されている。

これらのことをすべて総合し、通訳者に対する社会の認識の変化に関し社会背景などを合わせた考察の結果を報告する。

第 1 日（9 月 6 日）B 会場（W8E 307）　16:30 – 17:00
B-6 司会：西畑香里

大学院における「通訳実践指導」の授業設計と効果
董　海濤（北京外国語大学）

近年、中国における通訳翻訳修士課程（Master of Translation and Interpreting，MTI）の開設が増加しており、日本語通訳翻訳コースを設置する大学も多く存在している。このような背景の中で、大学院における通訳翻訳教育はますます注目されている。専門的かつ実践的な人材育成をするためには、カリキュラム設定において実践性を重視することが不可欠である。本発表では、北京外国語大学の日本語通訳修士課程における「通訳実践指導」という講義の教育実践を報告し、その効果と課題を検討する。

「通訳実践指導」は、通常の「逐次通訳」「同時通訳」といった講義とは異なり、教室での教員による直接指導が行われない。この講義では、中国翻訳通訳資格国家試験（China Accreditation Test for Translators and Interpreters，CATTI）の出題形式を採用し、事前に編集された動画を利用して逐次通訳の練習を行う。また、講義の構成は教室内での練習にとどまらず、事前準備と講義後の自己評価も含まれており、学習者の主体的な学びを促進する設計となっている。練習に使用する素材は、医学、経済、環境、自動車、宇宙航空、環境、社会問題など多岐にわたり、これらの素材を使って、逐次通訳講義用のライブラリを構築する。

本発表では、講義の位置づけと履修状況、受講者の背景、練習の材料、講義の進め方、教師の役割、成績評価方法などを報告する。最後に、2025 年の受講者を対象にアンケート調査を実施し、事前準備、講義本番、講義後の自己評価といった段階における学習負担、学習効果、満足度などを調査する。さらに、既存の課題を洗い出し、改善の方向性を探る。本発表は、通訳翻訳教育の実践的な側面に光を当て、実践的な教育が学習者のスキル向上に与える影響を明らかにすることで、今後のカリキュラム設計や教育方針に対する一助となることが期待される。また、受講者のフィードバックを通して、教育の質を向上させるための具体的な改善策を導き出すことで、通訳翻訳教育の発展に寄与する意義がある。

第 1 日（9 月 6 日）B 会場（W8E 307）　17:05 – 17:35
B-7 司会：西畑香里

技術支援を活用した視線追跡と訳出品質に関する研究：学生通訳者に焦点を当てて

張 晶（北京大学）、張 乾乾（北京大学）

近年、人工知能（AI）技術の急速な発展に伴い、自動翻訳や自動字幕生成、音声認識といった言語処理技術が実用化され、通訳教育の現場にもこうした先端的な技術を取り入れた支援ツールの導入が進められている。これらの支援技術は、通訳者が複数の認知的課題を同時にこなす際の負荷を軽減し、訳出の正確性・自然さ・流暢さといった品質の向上を支える手段として期待されている。

一方で、こうした技術的支援が通訳パフォーマンスや認知処理に及ぼす影響、とりわけ視覚注意の配分や情報処理の戦略にどのような変化をもたらすのかについては、まだ十分に体系的な実証研究が行われていない。特に、学習段階にある学生通訳者にとって、これらの支援がどのように機能するのかを定量的に把握することは、今後の教育設計にも重要な示唆を与えると考えられる。

本研究では、字幕提示や参考訳文の提示といった技術支援が導入された同時通訳環境において、学生通訳者がどのように視覚的注意資源を配分し、情報を認知的に処理するかを明らかにすることを目的とした。また、訳出の方向性（日→中／中→日）が視線行動や訳出結果にどのような違いを生じさせるのかについても検討を行った。

具体的には、11 名の通訳学習者（うち 1 名は眼球データの不備により除外）を対象に、技術支援の有無を変数とした 2 回の同時通訳課題を実施した。課題遂行中に眼動追跡装置を用いて、瞳孔径、注視時間、注視頻度、視線の移動経路、微小眼球運動などの視線指標を収集し、通訳パフォーマンスについては、忠実性、論理性、言語表現、流暢性、イントネーションの 5 つの側面から専門家による評価を行った。

収集されたデータは、通訳方向（日本語→中国語／中国語→日本語）、支援条件（有／無）、視覚領域（PPT、字幕、参考訳文）を要因とする三要因混合分散分析を通じて検討された。

本研究は、学生通訳者を対象とした実証的視線追跡分析により、技術支援の有効性と限界を可視化し、通訳訓練における支援設計の最適化に資する重要な知見を提供するものである。今後は、専門通訳者との比較や異なる言語組合せにおける実装効果の検討など、多様な視点から研究を拡張していくことが求められる。

第 2 日（9 月 7 日）B 会場（W8E 307）　9:20 – 9:50
B-8　司会：石原知英

警察における捜査通訳の構造的課題：非日本語話者の権利保障の視点から

道上　史絵（立命館大学）、村上　智里（関西大学）、吉田　理加（愛知県立大学）

日本の警察における捜査通訳体制について、猿橋（2005）は当時の捜査通訳体制に関する調査結果の分析を行い、その構造的特徴は周縁（少数言語）への努力傾注にあり、その背景に行為者（捜査側）と対象者（被疑者）間の受益関係の均衡があると述べた。2025 年 3 月、発表者らは猿橋論文に基づき質問書を作成し、警察庁企画課に送付、同年 5 月に回答を得た。本発表では、猿橋論文の主張を踏まえつつ、得られた回答を分析し、体制に内在する構造的課題について異なる視点から検討を試みる。

質問書には「部内・部外通訳人の活動状況」、「通訳に関する実務専科、通訳人研修の実施状況」、「言語別通訳人数」等、14 項目の質問を記載したが、うち 10 項目に対し(1)詳細な情報を得た。回答によると、部内通訳人が 2020 年から大きく減少しているのに対し、部外通訳人が増加している。言語の多様化も進行しており、その対応を担っているのが主に部外通訳人であることがわかる(2)。特に地方においては部外通訳人への依存度が高い。このように、回答からは現在の捜査通訳体制において部内通訳人の存在が極めて重要であることが読み取れる。しかし一方で、その採用基準や育成・フォローアップ体制の有無と具体的内容については明らかでなく、十分な批判的検討もなされていない。実際、近年においても部外通訳人による誤訳事例は発生しており(3)、それを防ぐための方策には依然として課題がある。

このような状況が是正されず継続している背景には、捜査側と被疑者との間にある構造的な優位—従属関係があり、まさにその点が猿橋論文において見過ごされている点である。日本の捜査通訳は、かどや（2023）が指摘する「非日本語人の権利保障・自律性」を伴わない多言語主義の類型（p.11）であると考えられる。この類型において制度提供側に顕著な構造的優位がある場合、多言語主義は対象者に対し付与される恩恵と見なされ、多言語化の取り組みが質を伴わない表面的なものであったとしても看過されてしまう。こうした状況を変えるには、権力構造の変革が必要であり、その点で捜査機関から独立した部外通訳人は枢要な役割を担う存在であると言える。ゆえに通訳人材の質の確保は喫緊の課題であり、さらに現行制度の下では実現が困難とされる部内通訳人の公正・公平な立ち位置を制度的に担保するためにも、法的整備とともに、捜査通訳制度を人権保障の視点から再構築することが求められる。

【参考文献】

猿橋順子(2005)「接触計画としての多言語施策：日本警察の通訳体制事例から」『言語政策』1：99-127.
かどやひでのり(2023)「ことばをめぐる包摂と排除」『ことばと社会』25 号：9-13.

【注】

(1) 情報が得られなかった 4 項目は、詳細を把握していないとの回答があった。
(2) 発表者らは、警察大学校への調査も同時に進めており、2024 年に部内通訳人育成のために開講された通年Ⅰ、Ⅱ課程（初修の段階から 2 年間で部内通訳人育成を行う課程）の指導言語が、近年捜査において必要とされる言語に十分に対応できていない状況を確認している。
(3) 例えば 2021 年に三重県で逮捕され、通訳を介して取調べを受けた被疑者は、部外通訳人による不適切翻訳などが要因となり起訴された。2023 年に津地裁で無罪判決を受けたが、約 2 年にわたり勾留された。

第 2 日（9 月 7 日）B 会場（W8E 307）　9:55 – 10:25
B-9　司会：石原知英

日本における司法通訳制度設計への提言―アメリカ、イギリスの実施例をもとに

毛利　雅子（名古屋市立大学）

コロナ禍で一時的に減少していた訪日外国人数は、コロナ収束に伴う経済復興、円安、さらに海外渡航の再活性化により急増し、オーバーツーリズムなどの問題も引き起こしている。近年では、この過剰ともいえる訪日外国人による様々な問題に加え、日本国内における外国人犯罪事案や民事事件も増加しており、捜査や審理の過程で日本語に通じない被疑者や参考人、被害者の対応が重要となっている。外国人、あるいは日本語に通じない者が犯罪や民事事件に関与した場合、被疑者、被害者、証人などの立場にかかわらず、通訳人の配置が必要とされる。この対応は、警察、検察庁、裁判所のみならず、出入国在留管理庁や税関にまで及んでいる。このうち、通訳人に関する統計が開示されているのは裁判所であるが、最高裁判所のデータによれば、この 10 年間で法廷通訳人の登録者数は約 2 割減少している。一方で、通訳を必要とする外国人被告の数はこの間に約 1.6 倍に増加し、通訳需要とのギャップが拡大しているのが現状である。
日本は先進国でありながら、司法通訳人制度については制度設計が全く整備されておらず、言語運用能力はもとより、倫理規範や行動規範の教育も行われていない。また、通訳人の待遇・報酬も十分に整備されておらず、これが登録者数減少の一因と考えられる。
一方で、司法通訳人制度が整備されている米国や英国では、政府が積極的に関与し、司法通訳人の確保と質の保証に貢献している。発表者は、実際に米国の The Federal Courts of the United States、NCSC（National Center for State Courts）、NAJIT（National Association of Judiciary Interpreters and Translators）、英国の NRPSI（National Register of Public Service Interpreting）、CIOL（Chartered Institute of Linguists）を訪問し、学会でのインタビューなどを通して、具体的な制度構築規範を調査してきた。
本発表では、これらの調査成果をもとに、日本において必要と考えられる司法通訳制度の設計について提言を行うものである。

【参考文献】

Cheng, L., Sin, K.K. & Wagner, A. (eds.) (2014). *The Ashgate Handbook of Legal Translation*. Dorchester: Ashgate.
Gonzárez, Vasquez & Mikkelson. (2012). *Fundamentals of Court Interpretation – Theory, Policy, and Practice (Second Edition).* Durham: Carolina Academic Press.
Mikkelson, Holly. (2017). *Introduction to Court Interpreting.* London/New York: Routledge.
Valero-Garcés and Tipton. (eds.) (2017). *Ideology, Ethics and Policy Development in Public Service Interpreting and Translation.* Bristol: Multilingual Matters.
産経新聞 2025 年 5 月 10 日記事 https://www.sankei.com/article/20250509-2LIYXOYYGBM2LN3IAI2MB32AUE/
毛利雅子（2022）『法廷通訳翻訳における言語等価性維持の可能性－現場から問う司法通訳翻訳人の役割と立場－』丸善プラネット

第 2 日（9 月 7 日）B 会場（W8E 307）　10:30 – 11:00
B-10　司会：石原知英

取調べにおける可視化導入がもたらす要通訳事件における訳出検証への影響
田村 智子 （国際基督教大学）

1984 年より既に取調べの全面可視化が導入された英国や、1990 年代に可視化の義務付けが加速したオーストラリアやカナダ等（指宿, 2019）に遅れること 20 年余、日本でもまだまだ限定的ではあるが 2019 年からようやく可視化が導入され、その後次々に明るみになる検察の取調べ問題等を受け、その適用拡大も検討され始めている（「検察」, 2025)。可視化に関しては、その導入が通訳人を介した取調べにおける訳出の正確性の検証を可能にし、よって適正手続きの担保には不可欠であるということが、これまでも多くの司法通訳研究者によって指摘されてきた（例えば 水野・内藤, 2015, pp. 102–103; 小林, 2014)。また、日本同様に可視化導入が遅れた州が数多くある米国でも（Bang et al., 2018, pp. 10–15)、導入後に未訓練者による事情聴取時の通訳問題が歴然となり、判決に多大な影響を及ぼす事態になった例も報告されている（例えば *Commonwealth v. Lujan*, 2018)。一方、取調べを行う側では、「通訳人が録音・録画を拒否する」場合も想定をしていることから（栗名ら、2020, pp. 95–97)、既述の研究者の立ち位置とは異なり、録音・録画により訳出の正確性が立証されることよりも、逆に訳出が一言一句検証され「明らかな誤訳」とかではない「わずかなニュアンスの違い」に関して「些末な批判」に繋がりかねないとして（栗名ら、2020, p. 89)、録音・録画を厭忌する通訳人も少なからず存在することが伺える。では、取調べにおける可視化の導入は、警察・検察での取調べ通訳人の訳出の検証に具体的にどのような影響をもたらしているのであろうか。本発表では、判例データベース（ウェストロー・ジャパン）で、「通訳」「取調べ」「供述」「正確」「誤訳」の 5 つのキーワードを用いて検索された 1951 年から 2025 年までの 74 年間における関連判例に関して、1）取り上げられた訳出問題に関する判例既述の内容には、可視化導入前と後で何らかの違いが表れているのか、2）可視化導入でもたらされるはずの訳出に関してのより詳細な情報は、判決自体にはいかなる具体的な影響を及ぼしているのか否か、に関しての分析と考察を述べる。

【引用文献】
Bang, B. L., Stanton, D., Hemmens, C., & Stohr, M. K. (2018). Police recording of custodial interrogations: A state-by-state legal inquiry. *International Journal of Police Science & Management, 20*(1): 3–18.
Commonwealth v. Lujan, 93 Mass. App. Ct. 95, 99 N.E.3d 806, 2018 Mass.
栗名仁・西谷陸・植村誠・石島正貴・市原久幸・鵜野澤亮（2020）『外事犯罪捜査ハンドブック』(第 2 版）立花書房
「検察の任意取り調べでも全過程の可視化を試行…供述誘導などを受け、最高検が方針」（2025, 2 月 26 日）『読売新聞オンライン』
小林浩子（2014）「司法通訳人の任務の諸相：司法通訳人の適格性を担保するために」『MEDIA, ENGLISH AND COMMUNICTION』第 4 号
指宿信（2016）『被疑者取調べ録画制度の最前線：可視化をめぐる法と諸科学』法律文化社
水野真木子・内藤稔（2015）『コミュニティ通訳：多文化共生社会のコミュニケーション』みすず書房

第 2 日（9 月 7 日）B 会場（W8E 307）　11:10 – 11:40
B-11　司会：内藤稔

通訳者を介した法律相談：相談者の個人的目的に則した通訳者の訳出行為と相談構造への影響に関する考察

森元　亜紀子（神戸市外国語大学 D）

法律相談など専門家相談では、相談者が問題を説明し、専門家が職業的専門性に基づき助言する。両者は問題解決という共通目的に志向したやり取りを行うが、知識授受の側面と、「感情処理」の側面をもつ現場の特性から、説得や感情的理解の欲求など、両者は個別の目的も持つ（伊藤、2002）。これらの目的は会話の展開を形作るが、通訳を介した場合、どう影響するだろうか。

専門家相談は、複数の自治体の国際交流協会で在住外国人に提供されており、ボランティア通訳登録者が通訳する。相談の重みを考慮すると、会話の展開への通訳者の影響を理解する事は重要だが、現場の実証研究は進んでいない。そこで本研究では、通訳を介した法律相談に注目し、相談者と専門家がどのようなことば・振る舞いを用いて目的を達成しようとしているのか、通訳者はそれをどう訳出し、どのような関係性が生じるのかを明らかにしたい。その際、Clark（1998）の joint activity の goal の概念を参照し、相談者と専門家の目的と、それに志向した行為を見出し、それらが通訳者の媒介でどのような行為として立ち上がるのかを分析する。また、Heritage（2012）の epistemic status（認識的地位）の観点から、両者が認識的地位をどう管理し、それが相互行為の中で聞き手にどう作用しているかも考察したい。

研究方法は、一地方の国際交流協会登録ボランティア通訳者（I）と在住外国人（F）、行政書士（S）の協力を得て、相談場面を録音・録画し、会話分析の手法により分析した。

本発表では、Fが在留資格変更手続きへの「懸念」を述べる場面を取り上げる。F のことばの用い方から、実は F はある違反行為の「言い訳」や「不満」を示している事が観察された。表面上、相談の主題に直結するトピックを活用しながら、個人的事情を理解してもらうという目的に志向していた。訳出ではFの語りが dramatize（Holt, 1996）され、Fが間接話法で示した伝聞情報が直接話法に変換され、聞き手 S が直接アクセスできるものとなり、Fの情報共有という行為が、より強い訴えになっていた。F の語りの固有性を強調した訳出は、その目的に寄り添う通訳者の行為と言えるが、実はそういった行為が、問題の個別的理解を求める相談者と、問題から個別性を排除し事案に還元する専門家の相談の構造を再生産する可能性も示唆された。

【参考文献】

Clark, Herbert H. (1996). *Using language.* Cambridge: Cambridge University Press.

Heritage, John. (2012). Epistemics in Action: Action Formation and Territories of Knowledge. *Research on Language and Social Interaction*, 45 (1): 1-29. https://doi.org/10.1080/08351813.2012.646684

Holt, Elizabeth (1996). Reporting on Talk: The Use of Direct Reported Speech in Conversation. *Research on Language and Social Interaction*, 29 (3): 219-245. https://doi.org/10.1207/s15327973rlsi2903_2

伊藤直文（2002）「「相談意図」とその「見立て」について　ー法律隣接領域の相談から見た法律問題」『現代のエスプリ』415: 138-147. 至文堂

第 2 日（9 月 7 日）B 会場（W8E 307）　11:45 – 12:15
B-12　司会：内藤稔

相談通訳者とは：相談員それとも通訳者

岩田　久美　（一般社団法人多文化社会専門職機構）

本研究は「相談通訳者」とは誰を指し、何をする人なのかを「コミュニティ通訳」の中の「行政通訳」現場で通訳や相談業務を担う人々を対象にその語りを分析し、「相談通訳者」の在り方を明らかにする事を目的とする。

「相談通訳者」については「コミュニティ通訳」の 4 つの領域（司法・行政・教育・医療）に加えもう一つの核となる専門領域であると考えられる（内藤，2013）。一般社団法人多文化社会専門職機構（TaSSK）は相談通訳者の認定試験を実施しているが、受験者の多くは一元的相談窓口や市役所などの窓口で通訳業務に携わる人たちである。相談通訳者とはこのような相談窓口で通訳を行う相談員・通訳者を指すのか、相談員と通訳者の両方を兼務する人はそれぞれの役割を分けて仕事を行う事ができているのか、これらの人達を雇用する立場にある管理者は、相談員や通訳者に何を求めどのような相談員・通訳者の評価が高いのかを明らかにしたいと考えた。

そこで本研究では、相談業務を行う場面で通訳に携わる人たちと、彼らを雇用する管理者の人達へのインタビューを行い語りを記述、分析して彼らの意識を考察した。

本研究のフィールドを愛知県に定め、3つの組織の調査対象者（相談員・通訳者 4 名、管理者 3 名）にフェイスシートによる質問調査を行い、その後対面で半構造化インタビューを実施した。IC レコーダで録音したものを書きおこしナラティブ分析と「フッティング」(Goffman, 1981)という概念を用いて分析した。

通訳者の語りからは通訳者は通常「発声体」として機能することが期待される傾向があり、聞き返すときの「本人」のフッティングや、ニュアンスを表現するための訳出の言葉を意識的に選択する「作者」のフッティングに通訳者がシフトする事は期待されていない、または役割の逸脱だと捉えられる傾向がわかった。管理者の「通訳者」に求める資質も、通訳者はあくまでも「発声体」として機能する事が求められている事がわかった。また組織によって相談員・通訳者が考える役割の違いと管理者の考えが共通している組織と、そうでない組織がある事も明らかになった。本研究を通して通訳者の役割について雇用する管理者たちの意識を記述する事で、管理者の通訳者への役割に対する理解がいまだ進んでいない事、そのため通訳者を使う人たちへの「ユーザー教育」の必要性が今後も求められると考える。

【参考文献】

内藤稔（2013）．「『相談通訳』におけるコミュニティ通訳の専門性」『シリーズ多言語・多文化協働実践研究　16 号　33-56 頁．東京外国語大学　多言語・多文化教育センター

Goffman. E. (1981). *Forms of Talk.* University of Pennsylvania Press

第 2 日（9 月 7 日）B 会場（W8E 307）　13:15 – 13:45
B-13　司会：武田珂代子

「英語の達人」とされる通訳者の先人たちの学習方略

内藤　稔（東京外国語大学）、高橋　絹子（関西大学）

日本にまだ衛星放送が開始されておらず、小中高の英語教育の現場でいわゆる ALT と呼ばれる英語教員が配置されておらず、またインターネットなどにより簡単に英語の音声を入手することができない時代に英語を学習し、通訳者になった「英語の達人」と呼ばれるような人たちはどのような学習方略を用いて、実務現場でキャリアを構築することができるだけの英語力を獲得したのであろうか。「英語の達人」の学習方略という点に関しては、竹内（2003）において、これを①日本で生まれていること、②12 才以降に本格的な英語学習を開始していること、③主として日本で英語を学び、留学経験があるとしても時間的に遅く、豊富ではないこと、④家庭環境として英語の使用が日常的ではないこと、⑤現在は英語を使う仕事をしていること、と定義した上で、対象者にインタビュー調査を実施している。

本研究では、この定義に沿って、しかも対象者を通訳者に限定して、どのような学習方略で通訳ができるまでの英語力を獲得したのか、インタビューをもとに調査を実施した。具体的には、国際化が本格的に到来しておらず、日本が変動相場制に移行する以前の 1 ドル 360 円の時代に英語を学習し、通訳のスキルを体得し、後にプロの通訳者となった人たちである。

調査結果の一部としては、通訳者以外の「英語の達人」と通訳者の間に見られた共通点として、「集中型の学習形態」（竹内 2003）があげられる。また差異としてはリーディングの方略において見られた。通訳者以外の「英語の達人」はリーディングの際に「大意を取りながら読む」という方略に対する言及がなかったと報告されている（竹内 2003）。その一方で、本研究の調査の結果では、通訳者は全体的な話の流れをつかむよう意識しながら学習したということが報告されている。その他、通訳者間ではさまざまな共通点が見られ、本発表においてそれを報告する。

現在では、英語学習の方法には多様な選択肢があり、対象者が学習した時代と比較すれば、全体的に安価な学習手段を、容易に入手可能な時代であるが、これらの結果で提示される学習方略が、今後通訳者を目指す学習者の一助となることを期待する。

【参考文献】

竹内　理（2003）『よりよい外国語学習法を求めて』松柏社

第 2 日（9 月 7 日）B 会場（W8E 307）　13:50 – 14:20
B-14　司会：武田珂代子

機械翻訳を介するコミュニケーションはいかに成り立つのか―在中日系企業の日本人駐在員の事例から―

朱　藹琳（愛知大学）

技術の進歩にともない、異言語間コミュニケーションの手段は変容しつつある。木村（2021）は異言語間コミュニケーションの諸方略について論じる際、機械翻訳を「言語的仲介の補助的手段」の一種として取り上げ、観光および商用の領域における応用の可能性を述べた。とりわけ多国籍企業や企業の海外進出の場合、海外への出張ないし駐在では、仕事も含めてあらゆる場面に通訳が必要とされているが、全てのシーンに通訳者が対応できることはほぼ不可能である。こうした場合、機械翻訳は使えざるを得ない手段になるであろう。

本発表では、中国の日系企業に勤務している日本人駐在員に対する半構造化インタビュー調査の結果に基づき、日本人駐在員と現地の中国人従業員が機械翻訳を介して対話する場合、そのコミュニケーション行為がどのように成り立つのかを分析する。中国語環境に置かれつつも中国語が話せない日本人駐在員が、機械翻訳アプリを用いて中国人従業員に指示などを伝達し、それに対して中国人従業員が理解して、自分の意見を機械翻訳アプリを用いて伝え、また日本人駐在員に理解される過程が繰り返して行われ、対面でありながら互いにスマートフォンを「見せ合う」という特殊なコミュニケーション方式が展開される。特に注目するのはこのようなプロセスにおいて、調査協力者である日本人駐在員は、自身の異言語・異文化知識およびその場におけるコンテクストや非言語要素などあらゆる資源を駆使して、プレエディットを通して日本語で「発話」したり調整を行ったりする中で、コミュニカティブな相互行為がいかに構築されているのかという点である。

この分析に基づいて、異言語間コミュニケーションにおいて機械翻訳が「通訳」の役を担う際、人間の通訳者が媒介する場合と比べ、相互行為の一連の過程にどのような差異が見られるかを探求したい。相互行為モデルでは、人間の通訳者は相互行為における積極的な参与者として位置付けられているが、機械翻訳の場合、話し手・聞き手である機械翻訳のユーザーが自ら調整を行わなければならない。このような変化によってこれまでの通訳モデルがどのように変容していくのかを探求したい。

【参考文献】

木村護郎クリストフ（2021）.『異言語間コミュニケーションの方法：媒介言語をめぐる議論と実際』. 大修館書店.

第 2 日（9 月 7 日）B 会場（W8E 307）　14:25 – 14:55
B-15　司会：武田珂代子

日本におけるラグビー通訳者に関する考察：インタビュー調査結果から

松見 誌野（名古屋外国語大学，名古屋市立大学 D）

近年、スポーツの世界においては、所属するチーム国の母語を解さない選手やコーチ、スタッフらが活躍するケースは少なくない。彼らの活躍を陰で支える存在がスポーツ通訳者である。板谷（2017）は日本のスポーツ通訳の中で最も歴史が長く、日本国民に馴染みがある存在として、プロ野球の通訳者を挙げている。中島（2015）によると、日本のプロ野球界で外国人選手が初めて誕生したのは 1934 年であるが、近年ではサッカーやバスケットボール界でも、チーム専属通訳者の活躍を目にする。

今日の日本のスポーツ通訳の中でも、日英通訳者の需要が高いスポーツがラグビーである。しかしながらラグビー通訳を含むスポーツ通訳は、会議通訳やコミュニティ通訳のように、通訳の仕事の種類として認識されていないのが現状で、板谷（2017）はスポーツ通訳が研究対象になることは極めて稀であると指摘している。

本研究の目的は、アド・ホック通訳者の占める割合が多いラグビー通訳者の就業実態を調査し、現場で通訳者が抱える課題を明らかにした上で、スポーツ通訳者全般の職場環境の改善及び彼らのステータス向上に寄与し、「スポーツ通訳は通訳の仕事の種類に含まれるべきか」という問いへの答えを明らかにすることによって、通訳者を志す人材の仕事の選択肢を増やし、スポーツ通訳の発展に貢献することである。

研究対象はリーグワン 2023-2024 シーズン参入チーム全 23 チームのうち、チーム専属通訳者を雇用する全チームの通訳者計 44 名とする。依頼方法については、知り合いのラグビー関係者に直接協力を依頼する縁故法を主な方法として採用した。研究方法はアンケート調査及びインタビュー調査とし、インタビュー調査ではアンケートの最後に設けたラグビー通訳についての自由記述欄について詳しくインタビューを行う。インタビューは録画録音し、修正版グラウンデッド・セオリーアプローチを使って分析を行う（木下、2020）。

【参考文献】

板谷初子（2017）「スポーツ通訳者に求められる役割～プロ野球球団通訳者に対する M-GTA を援用した分析を通じて～」『通訳翻訳研究』第 17 号：23-43.
木下康仁（2020）『ライブ講義 M-GTA-実践的質的研究法修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』弘文堂
中島国章（2015）『プロ野球最強の助っ人論』講談社現代新書

第 2 日（9 月 7 日）B 会場（W8E 307）　15:05 – 15:35
B-16　司会：宮田玲

能動的推論による翻訳プロセスモデルの構築と検証：翻訳者の「驚き」を定量化するシミュレーション

溝脇 孝哲（立教大学 D）、山田 優（立教大学）、Michael Carl (Kent State University)、Yuxiang Wei (Saint Francis University)、Aishvarya Raj (London Interdisciplinary School)、Devi Sri Bandaru (Kent State University)、Xinyue Ren (Kent State University)

近年、ChatGPT をはじめとする大規模言語モデルが機械翻訳の品質を飛躍的に向上させている。一方、その内部メカニズムは依然として「ブラックボックス」であり、自然言語処理などの分野ではその解明が進んでいる。これに対して、人間の翻訳者についてはアイトラッキングやキーロギングなどの行動データが豊富に蓄積されつつあるものの、内部状態の変化と行動選択を統一的に説明できる理論モデルは十分ではない。本研究は、人間の翻訳者の認知プロセスに焦点を当て、「能動的推論（Friston et al., 2017）」の枠組みを用いて翻訳プロセスのモデルを提案・検証する。能動的推論とは「驚きを減らすために考えて動く脳のしくみ」であり、生物の知覚や行動を自由エネルギーと呼ばれる驚きを定量化する指標で説明する。

本研究では翻訳プロセスを部分観測マルコフ決定過程としてモデル化した。①コーパスから作成した原文と訳文が対応する言語知識と、②プロセスデータベースから抽出した翻訳者の行動傾向を統合し、エージェントの内部モデルを構築した。エージェントは環境（テクスト）から逐次的に文字・単語を観測し、読むあるいは入力するなどの行動を選択する。各ステップで、能動的推論の考えに基づいて、変分自由エネルギー（VFE）で現在の信念を更新し、期待自由エネルギー（EFE）を最小化する行動を選ぶ「推論–行動ループ」を実装した。

シミュレーションの結果、訳語が一意に決定できる状況に比べて、曖昧性が高い状況では VFE が高くなった。これはエージェントが曖昧性ゆえに「驚き」を強く感じていることを示す。また、曖昧性が高い状況では「読む」行動の EFE が最小となる一方で、訳語を確信すると「入力する」行動の EFE が最小となった。これは、エージェントが曖昧な局面では「将来の驚きを減らすための情報収集」を優先し、十分な確信を得た局面では「目標である訳文完成に直結する入力」を優先するように、行動を自律的に切り替えることを示す。これらの結果から、能動的推論モデルは、「訳語に迷うほど読む行動を続け、確信が得られれば入力する」という直感的ロジックを自由エネルギーの変化として定量化できることがわかった。

今後は言語知識の量を拡大するとともに、削除・再読など多様な行動を導入して、翻訳スタイルの個人差や熟達度に基づく比較へ発展させる予定である。

【参考文献】

Friston, K., FitzGerald, T., Rigoli, F., Schwartenbeck, P., & Pezzulo, G. (2017). Active inference: A process theory. *Neural Computation*, 29(1), 1-49. 10.1162/NECO_a_00912

第 2 日（9 月 7 日）B 会場（W8E 307）　15:40 – 16:10
B-17　司会：宮田玲

自動車企業の通訳実践を通じた通訳者の役割転換

鄧 麗姍（通訳者） 龐 焱（広東外語外貿大学）

通訳は最も古い職業と言われている。古代中国では、通訳者を「舌人」と称し、真似をする「鸚鵡」のような存在である（黎難秋, 2002, pp.2-3）。また、ゴフマン（Goffman,1959）は「non-person」を提唱する。更にゴフマンの通訳観に類似した導管モデル（Conduit metaphor)という見方もある。従来の翻訳理論の影響で、通訳者は「裏の存在」とされている。1975 年に翻訳理論家であるジョージ・スタイナー（George Steiner）は通訳者は異なる言語集団の中のバイリンガル仲介者であると提起した（Steiner,G.1975,p.45）。また、Pöchhacker はコミュニティ通訳（Pöchhacker, 2016,p.63）において、対話の各方面は権力関係と社会文化的背景に相違があり、通訳者がその二者における調停の役割とすることに対して、会議通訳において、通訳者が発話者の予期した交流効果と目標受容者の交流ニーズを考慮し、その二者における文化的障壁をなくす「文化的調停員」であると主張した。

各学者が通訳の役割に対する異なる見解の変化を整理し、通訳者が一つの枠にとどまらず、場面によって異なる期待がされ、役割の幅も多くなりつつあると報告した。こういった先行研究に基づいて、通訳者の役割を以下の四つに分類し、自動車業界での通訳実践活動を通して、観察していく。①交流活動の参加者、②異文化コミュニケーションの交流者、③調停員やコーディネーターの役割、④対話のやり取りの維持者。

実践のなかで、忘れられた重要内容があった。通訳者は交流活動の参加者として主導能動性を生かし、確認の行為をすることで失敗を防げた。中日における風習などが異なるため、親近感を表す行動は逆に反感を買ってしまう恐れがある。異文化コミュニケーションの交流者として言葉の置き換えより、文化の違いを説明することで円滑に進めるケースもあった。ぎくしゃくしている交流の場面もあるので、調停員やコーディネーターの役割を意識しながら、双方の訴求を伝えながら、直訳ではなくて、言い回しを変えて調停する必要性でもあった。交流の場で、お互いに沈黙になるときがある。その場合に対話のやり取りの維持者として交流の目的を達成するために、場つなぎが必要であった。

今回の報告は自動車業界の通訳現場でどのような役割を求められているかを実践を通して探り、通訳者が現場のニーズに合わせた役割の転換が可能になることが期待できる。

[1] Goffman, E. (1959). The presentation of self in everyday life. New York: Anchor Book.

[2] Steiner, G.After Babel:Aspects of Language and Translation.OxFord:Oxford University Press,1975:45.

[3] Pöchhacker, F.Introducing Interpreting Studies.London /NewYork: Routledge, 2004/2016.

[4] 黎難秋（2002）.『中国口訳史』:2-3.

第 1 日（9 月 6 日）C 会場（W8E 308）　13:30 – 14:00
C-1　司会：山木戸浩子

日本の Feminist Translator Studies の可能性を探る
古川　弘子（東北学院大学）

本発表の目的は、近年議論されている Translator Studies の論点を整理してその可能性や限界を考察し、日本の Feminist Translator Studies を展開するための方法を探ることである。

翻訳学は様々な転回を経験しながら発展してきたが、近年は Translator Studies（翻訳者研究） Turn に入ったとの議論がある（esp. Kaindl, et al. 2021, Kaindl 2024）。Translator Studies という用語は Gengshen （2004）と Chesterman（2009）に端を発し、生身の人間である翻訳者の役割に注目してその意味と意義を考えるものだ。フェミニズムと翻訳研究の分野においても、2023 年には Translator Studies を冠した書籍 *Towards a Feminist Translation Studies*（Vassallo）が出版された。この視点は、AI 翻訳が普及する時代にこそ求められると考える。

多元システム理論では、社会の一部である翻訳テクストは社会の影響を受ける一方で、社会に影響を及ぼすと考える。そして、翻訳者は目標文化や言語に新しい概念を紹介することもある。例えば、『82 年生まれ、キム・ジヨン』（チョ・ナムジュ, 斎藤真理子訳, 2018）は韓国のフェミニズムを日本に紹介し、連帯を後押しした。また、フェミニズムの思想や女性の体験は、翻訳という行為があったからこそ地球規模で広がり、目標文化や言語に影響を与えている（Davis 2017）。加えて、同じ起点テクストであっても、各翻訳者の解釈と翻訳行為を通して生み出される目標テクストは全く異なることが示すように、翻訳者の役割は重要である（Gengshen, 2004, p. 113）。それにも関わらず、文学が世界に流通する過程において翻訳者や編集者（出版社）の役割は不可視化されてきた（秋草, 2020, p. 19）。韓国文学翻訳者の斎藤真理子氏やアディーチェなどの翻訳で知られるくぼたのぞみ氏など、訳者あとがきやインタビューでフェミニズムに言及する翻訳者もいるが、翻訳者自身についての研究はほとんど行われていない。したがって、Translator Studies ではエージェントとしての翻訳者や編集者（出版社）を研究の中心に据え、個々の声を掬い上げることにより、翻訳という行為にいかに関わっているかを探る。つまり、Translator Studies Turn とは研究手法と対象の転回でもある。ここでは、翻訳テクスト研究のための翻訳者分析ではなく、翻訳者研究のための翻訳テクスト分析を行う。

そこで本発表では Chesterman（2009）、Gengshen （2004）、Kaindl, et al. （2021）、Kaindl （2024）、Vassallo（2023）などの議論から、Translator Studies の概念と目的、理論的枠組みを概観する。さらに、研究対象や研究手法を整理したうえで、日本の Feminist Translator Studies の可能性と限界について考察する。

【参考文献】

秋草俊一郎（2020）『「世界文学」はつくられる 1827-2020』東京大学出版会

Chesterman, A. (2009) The Name and Nature of Translator Studies, *Hermes—Journal of Language and Communication Studies*. No. 42. pp. 13-21.

Davis, K. (2017) in Castro, O. and Ergun, E (eds.) *Feminist Translation Studies: Local and Translational Perspectives*. New York and London: Routledge. 111-135.

Gengshen, H. (2004) Translator-Centredness, *Perspectives*, 12 (2), 106-117.

Kaindl, K. (2024) The Translator's Nested Identities: Translator Studies and the Auto/biographical Turn, *Perspectives*. 33(2), 326-340.

Kaindl, K., et al. (eds.) (2021) *Literary Translator Studies*. Amsterdam and Philadelphia. John Benjamins Publishing Company.

Vassallo, Helen (2023) *Towards a Feminist Translator Studies—Intersectional Activism in Translation and Publishing*. New York and London: Routledge.

第 1 日（9 月 6 日）C 会場（W8E 308）　14:05 - 14:35
C-2　司会：山木戸浩子

翻訳修正の効果を説明するメタ言語の洗練と検証

山本 真佑花（東京大学 D）、宮田 玲（東京大学）

翻訳制作プロセスにおいて、翻訳結果の段階的な修正は必要不可欠なものであり、翻訳サービスに関する国際規格 ISO17100 においても、check、revision、review の各プロセスが規定されている（ISO, 2015）。より高品質な翻訳成果物の作成を目指す翻訳者やチェッカーにとって、そのプロセスによって生じた効果を認識することは非常に重要である。また、翻訳プロジェクトに関わる複数の作業者間の円滑かつ統一的なコミュニケーションを促進するためには、それらの効果を共有可能な言葉で説明する必要がある。たとえば、下記事例の下線部の修正には、目標言語圏で広く受け入れられる表現に適合させた（適合性）という効果があると考えることができる。

原文: This bag was $30.

修正前訳: このバッグは 30 ドルでした。

修正後訳: このバッグは約 4300 円でした。

Miyata & Miyauchi（2022）は、報道文書を対象に、機械翻訳(MT)による出力をポストエディット(PE)した際に生じた効果を言語化することで、上記「～性」のような基準の言葉 10 種類と、それらの小分類として 26 種類の観点の言葉からなるメタ言語を構築した（以下、「効果メタ言語」と呼ぶ）。Miyata & Miyauchi（2022）は、これまで取り上げられてこなかった翻訳修正の効果という視点からの新しい研究であるが、この効果メタ言語は、報道文書の MT+PE の結果のみに基づいていること、第三者による利用・検証を経ていないこと、という課題が残っていた。

そこで本研究では、多様なデータを使用し、第三者によるアノテーション実験を通して Miyata & Miyauchi（2022）の効果メタ言語の洗練および検証を行った。洗練作業は、報道文書以外の産業分野の文書を対象に、check と revision のプロセスで発生した修正箇所に、著者以外の第三者 2 名が Miyata & Miyauchi（2022）のメタ言語を用いて効果の基準・観点をアノテーションした。その後、著者らが作業者の結果を比較し、メタ言語の改良案を議論した。その結果、2 種類の基準と 6 種類の観点を追加し、修正版の効果メタ言語を作成した。検証作業では、上記とは異なる産業分野の文書を対象に、山本ら(2023)に基づく素朴訳から適訳への書き換えプロセスで発生した修正箇所に、第三者 2 名が改良版の効果メタ言語を用いてアノテーションを行った。そしてそれらの結果をもとに、異なる作業者による分類の一致度を確認しつつ、効果メタ言語の運用上の課題を探り、さらなる改良案を検討した。

【参考文献】

ISO. (2015). *ISO 17100:2015. Translation Services – Requirements for Translation Services*. International Organization for Standardization.

Miyata, R., & Miyauchi, T. (2022). Metalanguage for Describing the Effects of Revisions. In R. Miyata, M. Yamada, & K. Kageura (Eds.), *Metalanguages for Dissecting Translation Processes: Theoretical Development and Practical Applications* (pp. 116-128). Routledge.

山本真佑花, 藤田篤, 影浦峡. (2023). メタ言語としての英日翻訳方略体系の洗練―実事例と複数人の合議に基づいて―. 通訳翻訳研究, Vol. 23, pp. 15-35.

第 1 日（9 月 6 日）C 会場（W8E 308）　14:40 – 15:10
C-3　司会：山木戸浩子

訳語の定着に関するコーパス分析：色彩語彙の英日翻訳を事例として

木内 晶基 （東京科学大学 D）、野原 佳代子 （東京科学大学）、朱 心茹 （東京科学大学）

翻訳者の訳語選択に関する認知的研究では、二言語間の語彙や構文の定着とその翻訳プロセスへの影響に関する議論がある。ここで用いられる定着（entrenchment）とは、「個々の言語的知識が社会的環境の要請に応じて再編成され、適応されていく一般過程」（Schmid, 2017, p.436）のように定義され、翻訳においては、頻繁に用いられる訳語が無意識的に選択されやすくなる現象として捉えられる。翻訳プロセスに関する様々なモデルの中でも、Halverson の重力仮説（2003, 2017）では、このような認知言語学の概念を応用しながら、高い定着や顕著性によって訳出が誘引される過程をモデル化し、翻訳テクストに見られる過剰表現や過少表現といった現象に対して認知プロセスの視点から説明を与えた。近年では定着と認知負荷に関する実証研究（Heilmann et al., 2022）なども報告されてはいるが、翻訳者の語彙や構文のネットワークにおいて、SL と TL のアイテム間の結びつきがどのように強化され、訳出にどのように影響を与えているのかは、まだ十分に明らかにされていない。

本研究では、特に色彩語彙を対象として、視覚的情報を表す言葉の訳語選択における定着の特徴をコーパスから定量的に把握し、記述的分析を行う。分析では、訳語のばらつき（不確定性）を定着の指標の一つとして扱い、頻度とエントロピーによって形式的・意味的なばらつきを定量化する。コーパスとしては、青空文庫を元にした対訳コーパスと、大衆向け科学雑誌 Scientific American から作成した対訳コーパスを使用して、色彩語彙を含む特定の構文を分析対象とする。同一の翻訳者が行う訳出や、異なる翻訳者が行う訳出に対して訳語のばらつきを計算し、どのような語彙が一貫性を持って訳されるのか、または複数の訳で競合しやすいのかを分析する。また、最後に本研究がコーパスを用いた間接的な分析であることを踏まえつつ、コーパスベースの認知翻訳研究における課題と、プロセスデータと訳文データを統合的に分析する方法論の潮流についても概観する。

【参考文献】

Halverson, S. (2003). The cognitive basis of translation universals. *Target*, 15(2), 197-241.

Halverson, S. (2017). 1 Gravitational pull in translation. Testing a revised model. In G. Sutter, M. Lefer & I. Delaere (Ed.), *Empirical Translation Studies* (pp. 9-46).

Heilmann, A., Freiwald, J., Neumann, S., Miljanovic,Z. (2022). Analyzing the effects of entrenched grammatical constructions on translation. *Translation, Cognition & Behavior* 5(1), 110-143.

Schmid, H.-J. (2017). Linguistic entrenchment and its psychological foundations. In H.-J. Schmid (Ed.), *Entrenchment and the psychology of language learning* (pp. 435–452).

第 1 日（9 月 6 日）C 会場（W8E 308）　15:20 – 15:50
C-4　司会：藤濤文子

NHK国際放送の歴史と現況：現場の担い手たちによる海外発信の変遷
高橋 弘行 （駒澤大学 D）

NHK WORLD-JAPAN は、英語を中心とした多言語発信を行う日本で唯一の国際放送である。その歴史は戦前のラジオ・トウキョウから戦後の GHQ による中断期を経て、1980 年代までは短波ラジオによる音声の情報発信が中心であった。しかし 1990 年代以降、世界的な映像ジャーナリズム勃興の潮流に合わせ、テレビ放送による英語ニュース、さらにさまざまな情報番組などを組み合わせた国際放送の 24 時間体制へと大きく変貌を遂げて現在に至る。本研究は、現在のテレビ放送スタイルに移行した国際放送の黎明期である 1990 年代以降の約四半世紀を対象として、その時代時代で国際放送の英語ニュース原稿の作成・放送に携わった複数の現場関係者に対して聞き取りを行うことで、日本からの情報の海外発信がどのように変遷していったのかを明らかにするものである。関係者への聞き取りは大きく3つの年代で分類し、英語テレビ放送の立ち上げの時期である 1990 年代から 2000 年代初頭にかけてと、24 時間放送が定着した 2000 年代から 2010 年代にかけて、そして現在の放送体制がほぼ確立した 2010 年代後半から 2020 年代（現在）のそれぞれで、原稿作成・放送に関与したキーパーソンたちに聞き取りを行う。聞き取りの内容は大別してマクロ的アプローチとミクロ的アプローチに分けて行う。マクロ的アプローチでは、放送法、国際番組基準などNHKの放送を規定する法令や自主規制の中で、国際放送として「日本の見解を世界に伝える」ため具体的にどのような放送を行い、どのような課題があり、また実際にどのような成果があったのかを探求していく。ミクロ的アプローチでは、日本語のNHKニュース原稿を英語化する際に、それぞれの時代時代でどのような点が留意され、英語ニュースとして強調されたのか、また時代時代で立ち現れる重要ニュースをNHK内で翻訳する際、どのような議論が行われたのかなどについても考察していきたい。これらの試みによって、日本語から英語へとニュースが変換される際に生じるさまざまな困難についてどのように解消の努力がなされてきたのかを解き明かし、今後の日本の情報発信のあるべき姿を展望する一助としたい。

【参考文献】
高島肇久、伊藤陽一、有山輝雄、桂敬一、向後英紀、明石和康、我孫子和夫（2013）『日本からの情報発信―現状と課題―』（新聞通信調査会）
NHK国際放送局（2015）『国際放送の80年 NHKは何を伝えてきたか』

第 1 日（9 月 6 日）C 会場（W8E 308）　15:55 – 16:25
C-5　**司会：藤濤文子**

地方自治体職員による機械翻訳の使用と課題：翻訳品質保証の方略に注目して
阪本 章子 （関西大学）、宮田 玲 （東京大学）

労働市場での人手不足を背景に日本で働く外国人が増える昨今、外国人住民の増加と多国籍化が進んでいる。総務省は 2006 年から「地域における多文化共生推進プラン」(総務省, n.d.).を策定し、多様性・包摂性のある社会の実現を目標に掲げているが、翻訳を含む地方自治体からの情報の多言語化については具体的なガイドラインは定めておらず、具体的施策は各自治体に一任されているのが現状だ。とは言え、住民の多国籍化で必要とされる言語数はアジア諸国の言語を中心に増えており、十分な多言語情報発信は容易ではない。これを受け、自治体文書の翻訳に機械翻訳を利用することが予想されるが、訳出の品質リスクを伴う機械翻訳の利用には注意が必要である。

本研究では、翻訳のプロではない自治体の職員が機械翻訳を利用する際、機械翻訳の品質保証（Quality Assurance、以下 QA）にどのような方略をとっているかを明らかにすべく、人口規模と外国人住民構成の特徴が異なる3つの市の職員（全8人）への聞き取り調査を行った。その結果、自治体レベルでは翻訳関連の具体的なガイドラインはほぼ設定されていないことが分かった。その一方で、自治体職員により、以下の6つの QA 方略が取られていることが明らかになった。

まず、職員個人のレベルでは (1) 逆翻訳、(2) 2 種類以上の機械翻訳エンジンを利用してその結果を比較、(3) やさしい日本語をつかった原文テクストの前編集（プリエディット）、の3つの方法が取られていた。複数人の協力による方法としては、(4) 言語能力の高い職員との相談、(5) 外国人住民との相談、の2つの方略が特定できた。また組織レベルでは (6) 翻訳担当職員の採用、という方略が取られていた。もっとも、方略 (6) は自治体の規模により、方略の規模と方法に大きな違いが見られた。

本発表では、これらの方略について説明したうえで、どの方略についても人的リソース面での課題がある点を取り上げる。とくに、住民数の増えている低資源言語については確実なQAを行うには自治体内の人的リソースの充足が不可欠であること、とくに職員の「言語能力」と「翻訳能力」の違いの認識を高める必要があること、そして自治体ではその課題解決に構造的困難が存在することを議論する。

【参考文献】
総務省. (n.d.).「地域における多文化共生推進プラン」
https://www.soumu.go.jp/menu_seisaku/chiho/02gyosei05_03000060.html より取得。（2025 年 5 月 29 日）

第 1 日（9 月 6 日）C 会場（W8E 308）　16:30 – 17:00
C-6 司会：藤濤文子

自治体の「多文化共生の推進に係る指針・計画」における通訳・翻訳の位置づけの分析：指定都市、中核市、特別区を対象に

宮田 玲（東京大学）、島津 美和子（立教大学）

本発表では、日本の各自治体が策定する「多文化共生の推進に係る指針・計画」(以下、「多文化共生指針」)のテキストにおいて、「通訳」および「翻訳」という語がどのように使われているかを調査した結果を報告する。

日本では通訳・翻訳に特化して明文化された法令・条例は少なく、translation policy の概念が浸透していないことが指摘されている(島津, 2023)。とはいえ、法的な規定がなくとも自治体では通訳・翻訳サービスが提供されており、その全体的な方針は、総務省(2006；2020)による技術的助言を受けて各自治体が策定してきた多文化共生指針で言及されている。この多文化共生指針は 2024 年時点で、日本の全 1788 自治体（都道府県・市区町村）の内、995 自治体が策定しているが(総務省, 2024)、これらを広く対象とし、かつ、中身に踏み込んだ分析はこれまでなされていない。自治体が多文化共生指針の中で、翻訳・通訳をどのように位置づけているかの総体を描き出すことが議論の前提として不可欠である。

本研究ではその目標に向けた第一歩として、比較的記述が充実していると想定される指定都市、中核市、特別区(それぞれ 20、62、23 自治体)を対象に、多文化共生指針の日本語全文テキストデータ中で使用されている「通訳」および「翻訳」の語を網羅的に抽出し、各語の言及のされ方を分析した。まず、対象の 105 自治体のウェブサイトにアクセスし、多文化共生指針の全文ファイルを探し、98 自治体分の文書(PDF 形式)を収集した。続いて、機械学習に基づく文書解析サービスを用いて、文書中の構造情報(本文・見出し・図表の区別およびセクションの階層)を保持しながら、文書から文字列を自動で抽出し、一定の前処理を行った上で全文テキストデータを用意した。見出しを除いたテキスト中における「通訳」と「翻訳」の出現箇所はそれぞれ 1168 件、729 件であった。これら全ての出現箇所に対して、(1)言及の観点と主題の類型化、(2)文中の共起語パターンの分析を行った結果、「通訳」では通訳者などの担い手やその分野に言及されることが多い一方、「翻訳」ではそのような言及が少なく、翻訳機などのツールへの言及が多い、といった実態が明らかになった。

本発表では、translation policy 研究において、現在の状況や課題を包括的に可視化することの意義、方法論、限界点を共有した上で、上記の分析により得られた結果を報告し、今後の調査・分析の方針について議論する。

【参考文献】

島津美和子(2023)「国の法令中および自治体の条例中の 「翻訳」 と「通訳」 にみる日本の translation policy の現状と課題」『通訳翻訳研究』第 22 号: 53–74.

総務省(2006)「地域における多文化共生推進プラン」https://www.soumu.go.jp/main_content/000770082.pdf（アクセス日：2025-05-29）

総務省(2020)「地域における多文化共生推進プラン（改訂）」https://www.soumu.go.jp/main_content/000718717.pdf（アクセス日：2025-05-29）

総務省(2024)「多文化共生の推進に係る指針・計画の策定状況」https://www.soumu.go.jp/main_content/000984202.pdf（アクセス日：2025-05-29）

第 1 日（9 月 6 日）C 会場（W8E 308）　17:05 – 17:35
C-7 司会：藤濤文子

自治体の多言語対応における課題：持続可能性の観点から

武田 珂代子 （立教大学）、稲垣 浩 （國學院大学）

日本における在留外国人数は、2024 年末時点で約 376.9 万人に達し、3 年連続で過去最多を更新した。日本語に通じない外国人住民に向けた情報伝達やサービス提供が業務の一角を占める自治体では、1カ所で様々な手続きやサービスを提供する「ワンストップ型」窓口が設けられ、該当言語を話す相談員が配置されることが多い。本発表では、1990 年代初頭から「ワンストップ型」窓口で多言語対応を展開してきた群馬県伊勢崎市と太田市で行った調査結果の中から、主に外国語対応職員に焦点を当て、将来にわたり現在の仕組みが機能し続けられるか、つまり、持続可能性という観点から浮かび上がる課題や良好な実践について考察する。

まず、伊勢崎市と太田市の在留外国人数などの基本情報とともに、多言語対応の窓口が開設された経緯、現在の運営形態、外国語対応職員（相談員）の属性・採用方法・雇用形態・翻訳通訳を含む業務内容、言語別利用件数、相談内容などの概要を示す。相談員が対応できない言語を使用する住民に対しては、オンライン通訳サービスや音声翻訳システムの利用、また、やさしい日本語の使用で対応している点、また、その際の課題についても述べる。

次に、自治体による多言語対応の持続可能性を高める方策の糸口を探るために、両市における外国語対応職員の採用や業務に関する課題や良好な実践を考察する。まず、これらの職員は公募ではなく、関係者の紹介などを通して採用され、相談員によって、相談者の数や相談内容が大きく変化するという課題がある。また、該当言語を理解し、外国語対応職員の作業内容を点検できる正規職員がほとんどいないという課題もある。こうした状況を「信用」を鍵概念として分析する。次に、外国語対応職員の相談業務がスムーズに行われるためのマニュアルや教育は存在するものの、多言語対応の用語集など翻訳通訳業務に関する専門知識や情報が組織的に整備されていない状況がある。訳出の質や用語使用の一貫性を保つという意味から重要な課題である。自治体国際化協会（CLAIR）が提供する用語集などの支援資料を両市が利用していない点については、今後その理由や背景を分析する必要がある。最後に、伊勢崎市が民族・言語コミュニティごとに「多文化共生キーパーソン」を認定し、このキーパーソンとの連携で、双方向の情報伝達が効果的に行われていることを紹介する。

第 2 日（9 月 7 日）C 会場（W8E 308）　9:20 – 9:50
C-8　司会：石塚浩之

日中産業翻訳者のポストエディット能力とキャリアプロセスに関する質的研究

単　凱（東京科学大学 D）、佐藤　礼子（東京科学大学）

近年、機械翻訳の多用により、下訳作業が大きく縮減され、後工程としてのポストエディット（Post-editing, PE）が翻訳作業の中心となってきた。これにより、求められる能力が従来の翻訳実務に適合しなくなっている。本研究は、機械翻訳及び AI の翻訳精度が向上する中で、翻訳者に求められる新たな PE 能力が何か、キャリア発展と PE 能力についての認識を明らかにすることを目的とする。

本研究では、中国語母語の産業翻訳者 7 名を対象に、翻訳経験、自己評価、PE 能力、翻訳者の将来について、半構造化インタビューを行った。グラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA）と複線径路・等至性モデル（TEM）を組み合わせて分析した。分析の結果、翻訳者が必要とする PE 能力は以下の 5 つに分類された。

言語能力：言語の正確な理解力と表現力
検索能力：信頼性のある方法で用語、文化背景や専門知識などを検索する能力
判断能力：下訳の適否判断、翻訳ストラテジーなどの活用
ツール運用能力：翻訳支援ツールや生成 AI の運用スキルなど
職業能力：時間厳守、顧客対応、継続的学習への姿勢といった職業倫理・実務意識

続いて、翻訳経験について TEM を用いて分析し、キャリア発展の時期を分類した。

第I期　言語習得期：言語能力の基礎を形成する時期
第II期　翻訳スキル形成期：基本的な翻訳訓練を受け、業務に携わり始めた時期
第III期　キャリア模索期：異なる翻訳分野に挑戦しながら、スキルを習得し、自立を図った時期
第IV期　キャリア発展期：高度な専門性を獲得し、翻訳の質や評価の向上を目指す。翻訳者が定義する「成熟状態」に到達した時期

これらの結果により、7 名とも言語能力の形成と向上は、翻訳者のキャリア全体を通じて継続的に求められるものであり、自律的に身につける必要があると認識されていた。検索能力、判断能力及び職業能力は、キャリアの初期段階（第 I、II 期）で形成され、その後の業務経験の蓄積とともに自然と向上する傾向が見られた。ツール運用能力については、翻訳者のキャリア段階によって異なる特徴が見られた。若手翻訳者はキャリアの初期（第 I、II 期）から各種ツール、特に生成 AI に触れる機会が多く、訳文の一貫性や形式的な正確性を高める方法として、積極的にツールを活用する傾向があった。一方、経験豊富な翻訳者はキャリアの確立以降（第 III、IV 期）に生成 AI に触れたため、情報検索ツールと位置づけ、ツールへの理解が不十分と認識し、不安感が見られた。

第 2 日（9 月 7 日）C 会場（W8E 308）　9:55 – 10:25
C-9　司会：石塚浩之

ポストエディットが翻訳者の仕事満足度とやる気に与える影響：統計的手法による考察
阪本　章子　（関西大学）

本研究ではイギリスの翻訳者の労働生活の質を測定する Translator Work-Related Quality of Life（T-WRQoL）アンケートを 2024 年 8～9 月に行った。その結果のなかから、機械翻訳やポストエディットに対する翻訳者の態度が翻訳者の仕事満足度とやる気とどのような関係を持つかについて報告する。

機械翻訳の普及で、翻訳者の仕事が人手翻訳からポストエディットに移行しつつある。しかし、もともと翻訳者はポストエディットの仕事を嫌う傾向にあるうえ（Sakamoto, 2019）、ポストエディットの労働条件が低いという問題点が報告されている（Lambert & Walker, 2022）。本研究では、イギリスの翻訳通訳者協会（Institute of Translation and Interpreting: ITI）の会員を対象にアンケート調査を行い、労働生活全般や翻訳の仕事に関する 12 個の潜在的構成概念と、18 個の回答者属性を測った。データの一部をつかい、ポストエディットが仕事全般に占める割合（以下 PE 量）と潜在的構成概念の測定値との相関性を分析した。その結果、 PE 量の多い翻訳者ほどポストエディトの仕事に対してポジティブな態度を持っており、ポストエディットの仕事を楽しいと思っていることが分かった。一方で、翻訳者の PE 量は、労働生活全般のウェルビーイング、仕事とスキルのフィット感、クライアントとの関係、など数項目で負の相関関係にあることが分かった。また、「今後最低 5 年は翻訳の仕事を続けるつもりがあるか」という問いに対する答えは、12 個中 11 個の潜在的構成概念と正の相関関係にあったのに対し、ポストエディットに対するポジティブ感とは何ら相関性を見せなかった。以上の結果から、ポストエディットの仕事が翻訳者の仕事満足度に負の影響を与えている可能性が示唆される。また、ポストエディットが比較的新しい翻訳ワークフローであり、翻訳者全体でのポストエディットに対する態度や意見がまだ収れんしていないことが示唆される。

以上の結果を踏まえ、翻訳者がポストエディットに前向きに取り組むことができる環境整備をどのように行えばよいか、最終的に翻訳者の仕事満足度とやる気を高めるにはどのような側面を改善する必要があるかを議論する。

Lambert, J., & Walker, C. (2022). Because we're worth it: Disentangling freelance translation, status, and rate-setting in the United Kingdom. *Translation Spaces,* 11(2): 277–302. https://doi.org/https://doi.org/10.1075/ts.21030.lam

Sakamoto, A. (2019). Why do many translators resist post-editing? A sociological analysis using Bourdieu' s concepts. *The Journal of Specialised Translation,* 31: 201–216.

第 2 日（9 月 7 日）C 会場（W8E 308）　10:30 – 11:00
C-10　司会：石塚浩之

知識翻訳学に基づく科学ニュース中日翻訳ストラテジー：MTPE モデルによるポストエディットを中心に
程 琳（北京科技大学 M）、李 正政（北京科技大学）

科学ニュースは国のイメージや技術力を発信する重要な手段となっており、その翻訳には「迅速性」と「正確性」の両立が求められる。

本研究は、科学ニュースの中日翻訳を対象に、複数の AI や翻訳ツールといったデジタル技術によって訳文を獲得し、それぞれの訳文におけるエラータイプを注釈・分類して、訳文の総合評価を行った。その上で、知識翻訳学に基づき、ポストエディットを行い、「真・善・美」という三大原則を科学ニュース翻訳においてどのように実現するか、つまり、ポストエディットの改善ストラテジーを考察している。さらに、そのポストエディットのプロセスにおいて、翻訳者にどのような認知、知識及び言語能力を求めるのかを明らかにすることを目的とする。

本研究では、人民日報、新華網、光明網といった中国の主要な公式メディアが発信した中国語の科学ニュースを選定した。その日本語訳文は、以下の五つのデジタル技術——ChatGPT、DeepSeek(中国の AI プラットフォーム)、DeepL、有道翻訳(中国の主流翻訳アプリ)、百度翻訳(中国の主流翻訳アプリ)によって生成されたものである。

研究結果として、次のことが明らかになった。

まず、デジタル技術によるニュースの日本語訳文について、ChatGPT と DeepSeek といった AI を使う場合、ニュースの日本語訳は誤訳率が低く、用語選択の正確性や文体の一貫性、内容の読解性がいずれも高い水準が示されており、総合評価で高い得点率を得た。一方、有道翻訳、百度翻訳及び DeepL といった翻訳ツールを使う場合は、ニュースの日本語訳に必要でない直訳や文脈把握に不十分な事例が窺え、さらにニュース見出しや科学分野の専門用語の訳出に課題も見られる。

そして、科学ニュースの日本語訳文に対するポストエディットにおいて、翻訳者は専門用語と文化要素を含む語彙の誤訳、不適切な文の論理関係、数字表記の誤り、文体の不統一といった問題に修正の手間がかかることがわかった。また、専門用語の誤訳や、文脈における因果関係の曖昧さは、読者の理解を妨げる要因となり得る点も指摘される。

さらに、ポストエディット作業をした翻訳者に(1)技術分野の専門用語や知識に対する理解力、(2)優れた日中両言語の表現力、(3)翻訳ツールによる未完全な翻訳を補う能力といった能力を求めることが指摘される。それらの能力を備え、翻訳者は AI または翻訳ツールを「補助的手段」として活用し、科学ニュースの日本語訳文の品質を向上させることを目指している。

第 2 日（9 月 7 日）C 会場（W8E 308）　11:10 – 11:40
C-11　司会：朱藹琳

日中通訳初学者の逐次通訳における談話理解：談話の結束性と一貫性を中心に

晏　昭平　（城西国際大学 D）

本研究の扱う課題は、日中逐次通訳における初学者の起点テクスト理解に影響を及ぼす言語的要因を明らかにすることである。

通訳で扱われる起点テクストは談話である。談話（テキスト、ディスコース、文章, discourse/text）とは意味的にまとまりをなす文(連続)のことである(庵,1999)。談話は一貫性を持っている。一貫性とはテキストが作り出す世界と深層レベルにある思想概念の構成がお互いにマッチしていることである（メイナード,1997:28）。通訳では起点テクストの一貫性理解に問題が生じた場合、誤訳や訳漏れなどを招く可能性がある。実際に、日中逐次通訳の初学者（以下、「通訳の初学者」と略す）も、一部の単語や文法を聞き取れたが、個々の単語や文法を訳出するだけで、訳文は構造的にも意味的にも支離滅裂になってしまうことが多い。逐次通訳の初学者は「聞いているときは良く分かっていたが、思いだせなかった」と言うことがある（新崎,2016）。原因としては原文の一貫性が通訳できる程度までに理解されていない可能性もある。

意味の理論によれば、理解段階において「脱言語化」が必要であり、記憶に意味のみが保持されると指摘している（Seleskovitch & Lederer, 1984）。しかし、そもそも原発話の言語情報を正確に処理できなければ、「脱言語化」自体が不可能である。通訳者が理解段階において、まず音声情報から語彙を識別し、統語的・意味的処理を通じて、それらの語彙が意味的まとまりを形成しているかを判断し、それに概念的関係を活性化する（Moser, 1978；Setton, 1999）。しかし、異なる言語間には構造的、語用的な差異があるため、B 言語（外国語）が異なる場合には通訳理解の過程も異なると思われる。したがって、通訳において B 言語が日本語である場合の理解過程について、より詳細な検討が必要である。

本発表では、中国人の日本語通訳初学者を対象として、通訳における日本語の談話の一貫性を理解する問題点を分析する。まず、53 名の実験参加者に日中逐次通訳の課題を実施させ、次にその訳出内容を文字化し、独自のコーパスを構築した。それに、コーパスを利用して、起点テクストの一貫性理解における問題点を分析した。通訳の初学者は B 言語の日本語における指示、代用、省略、接続関係などを含む談話の結束性に関する理解が不十分であるため、起点テクストの一貫性理解の誤りにつながると結論付けた。今後の入門レベルの通訳教育における談話の理解への訓練の重要性が示唆された。

【参考文献】

庵功雄（1999）「テキスト言語学の観点から見た談話・テキスト研究概観」『言語文化』36：3-19.
泉子・K・メイナード(1997)『談話分析の可能性 理論・方法・日本語の表現性』くろしお出版.
新崎隆子(2016)「英日逐次通訳における記憶の負担と訳出精度」『通訳翻訳研究』16:1-20.
Seleskovitch, D.& M. Lederer(1984)『Interpréter Pour Traduire』Paris: Didier Érudition.
Moser, B(1978)「Simultaneous interpretation: A hypothetical model and its practical application」『Language Interpretation and Communication』Springer US:353-368.
Setton,R(1999)『Simultaneous Interpretation: A Cognitive-pragmatic Analysis』Amsterdam: John Benjamins.

第 2 日（9 月 7 日）C 会場（W8E 308）　11:45 – 12:15
C-12　司会：朱藹琳

日中 2 言語における慣用句の訳出過程に関する実証的研究

楊 潔氷（河南理工大学、東京都立大学）

本研究は中国語を母語とする日本語上級学習者（以下、日本語学習者）と日本語を母語とする中国語上級学習者（以下、中国語学習者）を対象に、日中 2 言語の慣用句の訳出過程にみられる特徴を分析することを目的とした。まず、慣用句（例：【日】手を貸す、【中】炒魷鱼）と自由結合（例：【日】手を握る、【中】炒青菜）の実験用刺激語に関する調査を行った。慣用句の属性が処理過程に影響しているのをふまえ、陳（2019）を参考に、慣用句の予測性を穴埋め問題で算出し、親密度と透明度を 7 段階尺度で数値化し、頻度をコーパスで調べ、慣用句の構成語の反応時間を語彙判断課題で測った。

次に、日本語学習者と中国語学習者を対象に、フレーズ判断課題[1]を用い、慣用句の属性が課題の正答率と正反応時間に及ぼす影響を、一般化線型混合モデルを用いて分析し、慣用句の理解過程を検討した。その結果、日本語学習者と中国語学習者の両方において、正答率と正反応時間に、言語種類（中国語と日本語）と刺激語のタイプ（慣用句と自由結合）の主効果がみられた（*ps* <.001）。日本語学習者の場合、中国語刺激語の正答率は 96.7%で、平均反応時間 843ms であったのに対し、日本語刺激語の正答率は 87.2%で、平均反応時間は 1294ms であった。一方、中国語学習者の場合、中国語刺激語の正答率は 87.6%で、平均反応時間は 1285ms であったのに対し、日本語刺激語の正答率は 97.7%で、平均反応時間は 929ms であった。つまり、日本語学習者と中国語学習者の両方においては、母語の正答率がより高く、反応時間がより短かった。また、刺激語のタイプ、言語種類、頻度、親密度、透明度の交互作用をそれぞれモデルに入れて分析した結果、正答率については、日本語学習者では有意な 2 要因の交互作用がみられなかったが、中国語学習者では親密度と言語種類との間に有意に近い 2 要因の交互作用がみられた。正反応時間については、日本語学習者と中国語学習者の両方で親密度と言語種類の交互作用が有意であり、親密度が高いほど反応時間が短かった。また、透明度や頻度等の影響は言語の種類によって出方が異なった。

上述した結果に基づき、日本語学習者の慣用句の翻訳過程を対象とした追加の研究として、翻訳判断課題[2]を用い、慣用句の親密度、透明度と日中 2 言語の類似度（本研究では起点言語と目標言語の類似度を指す）が課題の正答率と正反応時間に及ぼす影響を一般化線型混合モデルを用いて分析した。学習者の習熟度が翻訳過程に影響することを想定しているため、参加者を学部生と修士課程の学生に分けて検討した。なお、全ての参加者が日本語能力試験 N1 に合格し、その成績が 124 点以上の日本語専攻及び通訳・翻訳専攻の学習者であった。その結果、中日翻訳と日中翻訳の両課題において、学部生より修士課程の学生のほうの正答率が高く、特に中日翻訳課題における正答率の差がより顕著であった。他方、学習者の習熟度にかかわらず、中日翻訳より日中翻訳のほうの正反応時間が短かった。つまり、目標言語が母語の際により速く判断できることが分かった。また、翻訳の方向性と学習者の習熟度にかかわらず、日中 2 言語の類似度が高いほど正答率が高かった。一方、日中翻訳においてのみ、日中 2 言語の類似度が高いほど反応時間が短かった。発表では、これらの結果に基づいて翻訳過程の特徴について詳細を説明する。

【注】

1. 本研究におけるフレーズ判断課題は、コンピューターの画面中央に現れたフレーズ（刺激語）が意味として正しいか否かを参加者に判断させる課題であった。
2. 本研究における翻訳判断課題は、コンピューターの画面中央に現れたプライム（起点言語）の後にすぐに現れたターゲット（目標言語）が正しい翻訳か否かを参加者に判断させる課題であった。また、日中翻訳と中日翻訳の両方を取り入れ、翻訳の方向性を検討した。

【引用文献】

陳雯(2019).「慣用句の産出と理解に関わる諸要因：日本語学習者と日本語母語話者の比較を通じて」（博士学位論文）

第 2 日（9 月 7 日）C 会場（W8E 308）　13:15 – 13:45
C-13　司会：佐藤美希

訳語の品質を明示した日中対訳用語集の構築と分析

朴 惠（上海外国語大学・東京大学）、宮田 玲（東京大学）、山浦 育子（東京都江戸川区多文化共生センター）

本発表では、訳語の品質を裏付ける情報を付与した被災者支援分野の日中対訳用語集を構築・分析した結果について報告する。

人手翻訳・機械翻訳のいずれにおいても、対訳用語集は翻訳の品質と効率を左右する重要な存在である。昨今、様々な分野で対訳用語集が構築されているが、その多くは既訳の列挙に留まる。日本翻訳連盟用語バンク委員会（2021）は、翻訳業界における用語集運用上の課題として、用例・メタ情報・優先順位といった判断基準の不備により、用語の妥当性の評価が難しい点を指摘している。Sager（1990）や Warburton（2021）など専門用語管理の実務を扱った文献においても、用語のエントリーに定義、分野、品詞、出典などの情報を含めることが記載されているが、利用場面を考慮した用語・訳語の品質を直接示す情報の与え方については十分扱われていない。

上述した現状を踏まえ、朴ら（2024）は、対訳用語集に含まれる訳語の品質を評価するための 9 つの規準（規範性、正確性、形式的妥当性、理解容易性、参照可能性、用語性、通用性、識別性、一貫性）を提案した。本研究では、各規準の判定方法を具体化した上で、それに基づき訳語の品質を明示した対訳用語集を構築し、その構築結果を記述的に分析した。

構築した対訳用語集には、被災者支援分野の日本語用語 455 語とその中国語訳 478 語が含まれる。全ての対訳用語には、日本語用語の出典となる原文と中国語訳に対する上記 9 つの規準の判定結果を付与した。また、規範性もしくは通用性があると判定された訳語に対して、それぞれ根拠となる公式訳の出典もしくは作成した訳語の対象分野における使用実績（用例）を付与した。また、構築した用語集における各規準の付与結果を観察することで、以下のことが明らかになった。

- 用語の訳語として成立するには、正確性と形式的妥当性のほかに、一定以上の用語性と理解容易性も満たす必要がある。
- 公式訳が存在しない訳語 375 語の内、168 語では用例も見つからなかったことから、コーパスベースの用語抽出の限界が示唆された。
- 日本語用語 23 語に対して複数の訳語が存在し、そのうち 17 語（訳語は 34 語）では理解容易性と参照可能性のトレードオフの関係が見られた。

なお、構築した用語集は、クリエイティブ・コモンズ・ライセンス表示 4.0 国際（CC BY 4.0）を付与し、オンラインで公開した（朴ら, 2025）。

【参考文献】

Sager, J. C. (1990). *A Practical Course in Terminology Processing*. John Benjamins.
Warburton, K. (2021). *The Corporate Terminologist*. John Benjamins.
日本翻訳連盟用語バンク委員会(2021).「用語バンク実現に向けた検討と課題」https://www.jtf.jp/pdf/Ybank_202103.pdf（アクセス日：2025-05-30）
朴惠，宮田玲，山浦育子(2025).「被災者支援のための多言語用語集：日中 v1」https://github.com/tr4lg/controlled-multilingual-terminology/tree/main/terminology-disaster-victim-aid（アクセス日：2025-05-30）
朴惠，山浦育子，宮田玲(2024).「日中対訳用語集構築に向けた翻訳の規準と手続きの明確化：被災者支援分野を対象に」日本通訳翻訳学会第 25 回年次大会，神戸.

第 2 日（9 月 7 日）C 会場（W8E 308）　13:50 – 14:20
C-14　司会：佐藤美希

現代中国語から現代日本語への翻訳/通訳における中国古典籍引用の処理について
永田　小絵（東洋大学 D）

本発表では、現代中国語から現代日本語へ訳出する際に、中国古典籍の引用をどのように処理すれば受け手に適切に伝えられるかを考察する。

現代中国語の一般図書や学術論文、あるいはスピーチなどでも、中国古典籍の引用は頻繁に行われている。これらの引用は、論文の主題に関わるものだけでなく、著者の主張を補強し、歴史的・文化的背景を示唆するための重要な要素となり、ときには故事成語や慣用句の形でクリシェとして文中に用いられることもあり、文脈における有標性の程度もさまざまである。古典籍の語句や文が原文においてどの程度の効果と有標性を具えているかの判断は訳者に委ねられるが、古典籍の引用を含む中国語の文章を現代日本語へ訳出する際には、以下に挙げる課題に取り組まなければならない。第一に、古典籍の持つ歴史的・文化的コンテクストをどのように適切に伝えるかという意味内容の伝達に関わる問題、第二に、現代中国語の文中に出現する古典中国語の違いを、日本語訳において保持すべきか否かという文体の形式上の問題である。 中国古典籍から現代日本語への訳出には、翻訳の一般的な困難である文化的差異と空間的（地理的）距離だけでなく、古代と現代の時間的な隔たりが存在している。さらに、外国語としての中国語教育と漢文教育の乖離、あるいは連携の欠如によって、主として外国語を学修した職業翻通訳者には中国古典籍に明るい者が少ないという問題もある。

本発表では、受け手（読み手・聞き手）に古典籍の内容や文体を適切に伝えるための手法として、訓読書き下し文の活用、訳注・解説の必要性と作成方法などについて、実例を交えながら分析を行う。

使用するテキストとして以下を用いる。

1　葛兆光著『到後台看歴史卸粧』とその日本語訳
　古典籍を数多く引用する学術エッセイ。
2　陳冠中著『北京零公里』とその日本語訳
　中国語文言文の文体を模した長編SF小説。
3　漢詩文を多く引用するスピーチとその日本語訳（日本語への同時／逐次通訳例）
　一般視聴者向けのテレビ番組における中国食文化と文学に関する講演

テキスト
葛兆光『到后台看历史卸妆』（四川人民出版社、2021 年）
陳冠中『北京零公里』（Oxford University Press・China、2020 年）

参考文献
川本皓嗣「漢文訓読とは何か―― 翻訳論と比較文化論の視点から」（大手前大学論集第 11 号（2010）1－26 頁）
倉石武四郎『支那語教育の理論と実際』(岩波書店、昭和十六年)
福島直恭『訓読と漢語の歴史（ものがたり）』（花鳥社、2019 年）

第 2 日（9 月 7 日）C 会場（W8E 308）　14:25 – 14:55
C-15　司会：佐藤美希

近代『茶経』の和訳本と『茶の本』の思想的対照：近代日本における中国古典翻訳の一側面

陸　書涵（大阪大学 D）

『茶経』は刊行されて以来、千年以上の歴史を有し、中国および日本の茶道文化に深遠な影響を及ぼしてきた。1774 年には大典禅師によって日本における初の和訳本『茶経詳説』が出版されたが、その後、『茶経』の翻訳は 160 年以上にわたり停滞していた。1935 年に近代日本の初の和訳本が出版されて以降、現在に至るまで日本では『茶経』の訳本の単行本・合集が計 11 冊刊行され、総計 8 名の訳者が『茶経』の翻訳に携わっている（盧冬麗・陸書涵,2024, p.122）。しかしながら、近現代にこれほど多くの訳本が現れた背景については、未だ学界において十分に検討されていない状況にある。

1906 年、岡倉天心により英語で執筆された『茶の本』は、アメリカで出版された。本書は中国茶道文化および『茶経』について比較的詳しく紹介している。布目潮渢は『中国の茶書』の中で、『茶の本』が日本語に翻訳される以前、日本で読めた中国の茶書は『茶経詳説』のみであったことを指摘している（布目,1976, p.31）。1929 年には、『茶の本』の和訳本が岩波文庫に収められた。その後、1935 年に大内白月の『茶経』、1941 年に諸岡存の『茶経評釈』が出版された。錯綜した近代日本の思想的背景に鑑みるならば、『茶の本』の和訳本の出版と『茶経』訳本の相次ぐ出現は、両者に内的関連があったことを示唆していると考えられる。

本稿は、諸岡存の『茶経評釈』のパラテクストを研究対象として取り上げ、『茶の本』が近代日本における『茶経』の翻訳に与えた影響を考察し、さらに近代日本の思想が中国古典の翻訳・受容に干渉した経路を浮かび上がらせる。岡倉天心は『茶の本』において日本茶道文化性を強調する一方、『茶経』のイメージを再構築することでその文化的・歴史的価値を日本茶道文化に移植し、日本茶道文化の正統性を構築したと考えられる。

一方、社会の動乱にともなう思潮の転変を背景に書かれた諸岡存の『茶経評釈』の序跋には、天心の中国茶文化に関する論述の中心思想が継承されているとともに、「大東亜主義」的傾向が露わとなっている。諸岡は中国南宋時代以降の中国茶道文化の衰退を論じることで、日本が中国の茶道文化の継承者であるといえること、『茶経』を注釈する権威性を有することを主張している。こうした思想的主張は、序跋のみならず『茶経評釈』の一部の注釈にも具現化されている。

【参考文献】

盧冬麗・陸書涵（2024）「茶典籍『茶経』の日本における翻訳および受容」『翻訳界』第1号：113-125.
布目潮渢・中村喬編訳(1976)『中国の茶書』平凡社.

第 2 日（9 月 7 日）C 会場（W8E 308）　15:05 – 15:35
C-16　司会:田村智子

高等学校国語科と英語科との連携による翻訳者の解釈をめぐる教材開発:『こころ』とその英訳作品を中心に

守田 智裕 （広島大学附属福山中・高等学校）、井上 泰 （福山大学）

高等学校学習指導要領では、国語科・外国語科相互の「教科等横断的な学習の充実」が図られている。両教科連携の試みはこれまでも行われてきたが、それらの多くは文法学習に関わるものにとどまっており、読むことの指導、特に作品の解釈に関わるものは少ない。しかし、必履修科目「言語文化」の学習指導要領解説では、翻訳活動や原典との比較読みなどを通じて、学習者が解釈を交流することが想定されている（文部科学省, 2019）。そこで、本発表では、現行の教科書に多く採択されている夏目漱石『こころ』とその英訳二作品を用い、翻訳者の解釈をめぐる教材開発について問題にしたい。

取り上げた翻訳作品は、①文学者の近藤いね子による Natsume (1941) および②アメリカ人翻訳家の McClellan による Natsume (1969) である。教材として取り上げたい場面は、「私」が K に「精神的に向上心のないものは馬鹿だ」と言い放つ直前、K が弱っているところを見つけたところである。特に次の一文の翻訳に注目したい。「罪のない K は穴だらけというよりむしろ開け放しと評するのが適当なくらいに無用心でした」。この一文は、「他流試合」でもするかのように準備万端で隙なく K の動向を見ている「私」が語られた後に、その時の K の様子として語られたものである。①では以下のように訳されている。

> The innocent K, <u>on the other hand</u>, was so careless that it was more suitable to describe him as thoroughly open to the attack than as full of unguarded points. (Natsume, 1941, p.201、傍線は引用者)

傍線部 on the other hand に注目したい。この句が示す「一方」という意味は、原典では書かれておらず、②には訳されていない。しかし、文脈上は相談を持ちかけられたにも関わらずそれに乗じて友人を打ち倒そうとする私と「罪のない」と形容される K とが対比的に書かれている箇所である。この対比の文脈は作品を通して語られ、それが①においては明示されているのである。

こうした翻訳と出会うことで、学習者は、翻訳は逐語訳ではなく、翻訳者の解釈に基づいた表現の工夫がなされているということに気づくことができる。さらに、翻訳者の解釈と出会うことで自身の読みを振り返ることができ、それは国語科の学習を深めることになる。

以上のように、翻訳作品を教材化することで両教科の学習は充実していく可能性がある。当日の発表では比喩の翻訳を含む別の引用箇所も示しつつ、具体的な教材化の提案を行う。

【参考文献】

Natsume, S. (1941). *Kokoro* (I. Kondo, Trans.). The Hokuseido Press.
Natsume, S. (1969). *Kokoro* (E. McClellan, Trans.). Henry Regnery.
文部科学省. (2019).『高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説　国語編』.開隆堂.

第 2 日（9 月 7 日）C 会場（W8E 308）　15:40 – 16:10
C-17　司会：田村智子

Practicing Translators' views on the AI-related copyright law and its issues.

Ryohei Watanabe (Rikkyo University M)

The advent of generative AI, particularly ChatGPT, has brought the translation industry to a critical juncture. Many literary and non-fiction translators express concern over the possibility of being replaced by AI, while ongoing debates over copyright and AI legislation may significantly impact the future of the profession. Although research on translation copyright and AI has been conducted from global academic perspectives, little attention has been paid to the voices of practitioners within the Japanese context. This paper first presents the results of semi-structed interviews conducted with three literary/non-fiction translators with decades-long careers. It then discusses contextual factors that might contribute to the answers of interviews.

The results illustrate that the interviewees are not completely opposed to (AI-based) machine translation and acknowledge beneficial aspects of the current AI-related copyright regime in Japan at the same time. However, they are certain that the current regime poses a problem that cannot be fixed easily, particularly about the fact that Article 30-4 (2) makes it possible to use translations for machine learning without anyone's permission and no compensations are offered. Therefore, they place emphasis on the importance of a fair payment system, a legal base, and an ethical method for ensuring the sustainable future of the industry.

Additionally, the results suggest that Japan's AI-related copyright regime is largely ignored in translation publishing, as most translators and publishers are unaware of it. While some translators recognize that neglecting this issue could harm the industry's future, they are less vocal than their overseas counterparts. The interviews also highlight a problem in contract practices: contracts are often sent after translation or publication, so many translators don't read them, reducing their importance.

One contextual factor to these findings is the unequal power balance between translators and publishers in Japan, which makes it hard for translators to assert their rights. Unlike some overseas associations, Japanese translators' associations rarely take the lead in copyright discussions, failing to represent their members effectively. In addition, the lack of translator training in higher education may be a factor in the professional status of translators, contributing to their invisibility in debates about copyright and contract rights.